

東京立正女子短期大学紀要

第 11 卷

目 次

日本女子教育の発展.....	近 藤 久美子 (1)
オフィス・オートメーション(OA), ワードプロセッサ(WP), とタイプライティング.....	井 口 美登利 (10)
『罐詰横町』について ——ドックとマックの人間像——.....	深 沢 俊 雄 (27)
サートリス論 —— romantic なるもののかげで ——.....	佐 藤 秀 一 (42)
津田梅子の女子教育について.....	石 川 教 張 (77)
鎌倉幕府衰亡論 ——蒙古合戦に敗れた東国政權——.....	堀 教 通 (92)

1 9 8 3

東京立正女子短期大学

日本の女子教育の発展

近 藤 久 美 子

日本が「ポツダム宣言」を受諾、無条件降伏をしたのが昭和20年（1945年）8月15日であり、その2年後、1947年に、新憲法が作成され、土地改革、教育制度改革等もろもろの変革があった。この改革の一つが、学校、教育制度の中に、男女共学制を全面に亘って施行し、6・3・3制を導入した教育新制度があって、その時から、35年という歳月が流れようとしているのであるから、もはや、これを、新制度と呼んでよいか、どうかは別として、私は、この教育新制度の前の制度下で教育を受けた来たる者であるから、それに対応する言葉として、旧制度で教育を受けてきた。尋常小学校6年、中等学校（女子の場合はこれを、高等女学校、若しくは、女学校と称した）5年、そして、更に旧制度下の女子英学塾（今日の津田塾大学の前身）を、昭和8年（1933年）に入学、昭和12年（1937年）に卒業しているから、私の経て来た教育旧制度を、女子の観点から眺めて、少しばかり述べてみたいと思います。

教育旧制度がどの様に明治の初年から始まって発展し、ある時は後退し、そして熟してきたかを、女子教育に焦点をあててみてゆくと、日本に於ける女子教育の歴史を述べてゆく事になります。そして私がこれから述べる事もその片鱗にふれるだけではあるのですが、私からみて重要だと思われる事に焦点をあててみると、日本では、女子教育は、特に高等教育は、ハイヤーエジュケーション「英学」を中心に発展して行つたと申しても過言ではないと言う事に気づくのです。

日本に於ける高等教育の場は、宿命的に、歴史的に、伝統的に、「英語」という、語学を中心にして発展して行つた観があります。日本に於ける女子高等教育界は、その始めに於て、好む、好まないの問題に、かかわりなしに、「英語学」の私塾を中心に発展せざるを得ない様な状況下に進んで

いたのです。従って、女子の人材も、すべて全部が全部とまでは言えないとしても、おおかたが、この「英語」教育を中心に行っていた高等教育の場から輩出していた事は、歴史的にみて事実であったと言っても過言ではないと思われまゝ。それは、語学を通して、言語のテクニクをたたきこまれてきたという事のみならず、語学を通して学問をさせられ、教養を深められてきたという点で、そういう面でない分野の人より、国際的に、目をむけざるを得ないものを抱括して、学問をさせられてきたからであり、その間に培われた世界観は、自ら、他の分野での人達とは、異質のものになってきていたのは、当然の帰結だと思われるからです。この英学を中心にして学問をしてきた人達の中には、一般的に言って、リベラルな思想を持つ人が多く、又或る意味では、日本の国家主義（若しこういう表現が許されるなら）とは摩擦を生じかねない考え方を持つ人も現われる様になり、それが各時代の思想の影響下にあつて、ある時は助長され、ある時は圧迫を受けて、各時代に批判され、又賛同を得て、発展して行つた事が、想像されます。何が正しいかは、その後の歴史が証明する事になるでしょうが、人間は、それぞれの時代の思想の流れの中で、又世界状況の中で、自分が最も、真実で、正しいと信ずるものを撰んで、その行くべき道を決めて行くものだと思ふのです。「言語」はそれを使う人間の哲学、人生観、世界観と密接にかかわりをもつものであり、言葉はその国民の哲学の表現そのものであるとすれば、語学は、それを学ぶ人に多かれ、少なかれその影響を与えずにおかないものと考えられます。

日本に於ける女子高等教育発展史に於て、明治時代以前のあり方をふまえて考える事の重要性も考慮に入れなければならない事は、当然の事ではありますが、今回は、あえて、その問題はさしおいて、明治維新後の事からふれてゆきたいと思ひます。

明治の初期、それも、明治4年（1871年）から10年位迄（1877年）は、日本の明治政府は、実に進歩的な思想の下に、教育改革を行おうとしていました。例えば明治4年（1871年）11月21日（大陽暦12月23日）5人の国費に依る女子留学生を、米国に留学させています。その5人の中に、当時7才の津田梅子があり、彼女は、留学生の中の最少年者でしたが、後年、即ち明治33年（1900年）今日の津田塾大学の前身、女子英学塾を開設して女子高等教育の道を開いたわけです。女子英学塾は、梅子没後、津田英学

塾と改名、これは教育制度改正迄続き、戦後、津田塾大学と名称を変えました。彼女が1900年に女子英学塾を設立した事は、明治初年の教育への理念を、実現させ様としたと申しても過言ではないでしょう。彼女は第1回の留学を終えて帰国した直後は、日本語が話せなくなっていたと言う事ですが——7才で渡米、18才で帰国という永い米国滞在の結果がこういう事になった事は、容易にうなづけます。然し、彼女が帰国した頃は、日本の教育界は、明治初年のその頃とは異なり、すでにかなり反動的になっていた事を、聡明な彼女は、見抜いていたと思います。2度目の留学を終えて帰国した明治30年頃は、女子高等教育界は、もっと、反動的になっており、女子の為の高等教育はおろそかにされておき、その事も彼女は、見抜いていたと思います。彼女は「英学」を中心として、女性に本当の意味の高等教育を与えたいと願っていた事でしょう。

明治4年に、日本政府が5名の女子留学生を米国に派遣した背景には、梅子が後年実現させた理念と一致するものがあったわけで、5名の中、梅子のみが、その理想を女子英学塾創設に依って果たしたと考える事もできます。前述で、私は、明治政府は、明治10年(1877年)頃迄は、進歩的、啓蒙思想を以って、女子をも含めて、教育改革を行おうとしていたと申しましたが、その後は、種々の情况から反動的な運動気運が起り、次第に女子には、それほどの高等教育を与えない方がよいという考え方が大勢を占めて行くに至りました。即ち、もっと家庭的な良妻賢母型の女性たるべく教育をした方がよいという考え方が世間に拡がって行きました。

従って、津田梅子が明治33年(1900年)に女子英学塾を創設した頃の日本の教育界のあり方は、前述の反動的な運動が起って、それが実施されていた真最中の時であったと思われます。梅子の第1回目の帰朝は、梅子18才の時で、2度目の留学を終えて帰国した年が明治25年(1892年)梅子28才の時です。留学を終えて帰ってきた梅子の目には、政府に依る女子高等教育が軽んぜられていると映った事でありましょう。そうしてこの事が、梅子をして、女子英学塾を設立する事を思いたたせたと想像されます。

反動が起った証拠には、即ち女子教育と男子教育の修業年限の格差がその一つに挙げられます。国立、官公立の大学にあって、男子の行くべき道と、教育を受ける期間年数が異なるのです。

尋常小学校		中 等 学 校 5 年	高 等 学 校 3 年	大 学 3 年	17 年
男 子	6 年				
女 子	6 年	高等女学校 5 年	専 門 学 校 4 年		15 年

男子のそれは、小学校6年、中学校5年、そして、更に高等学校（旧制高等学校）は、今日の高等学校とその質に於ても異なります。レベルがずっと高いのです。そして最後が大学の3年間ですから、17年の長きに亘って、教育を受け、学士の称号が与えられたのです。女子のそれは、小学校6年、高等女学校5年——地方によってはそれが4年で終了という所もありました——そうして、若し、女子で教師になる事を望むなら、尋常小学校の教師の資格を得るのに女子師範学校での2年間があり、高女の教師の資格を得るのに、東京と奈良に4年制の、女子高等師範学校があったのみで、しかもこれら東京と奈良の女高師にも、語学の教師となる為の教科課程はなかった。今日のお茶の水女子大はこの時の東京女高師がその前身ではあるが、英語・英文科の設立は今日の教育新制度で、始めて、はじまった事に人は気がついていたでしょうか？女高師時代にはなかったという事です。教育の旧制度下にあつては、女性の高等教育を受ける場はこの女子師範（2年制）と女高師（4年制）しかなく、前者にあつては、 $\overset{\cdot}{6} \cdot \overset{\cdot}{5} \cdot \overset{\cdot}{2}$ の13年間、後者にあつては、 $\overset{\cdot}{6} \cdot \overset{\cdot}{5} \cdot \overset{\cdot}{4}$ の15年が教育を受ける期間の長さで、男子の行く最高学府のそれと較べてみると、2年乃至5年の年月の差があります。

ところで、旧制度の男子の行く大学の前の課程の旧制高校は、今日の高校とは、質・レベルともに異り、旧制度下の高校は、^{ハイヤー・エジュケーション}高 等 教 育に属するものであり、今日の高校は、^{セカンドリー・エジュケーション}中 等 教 育に属します。旧制度下のそれは、今日の大学の低学年に当るわけです。

旧制度下に於ける男子の[○]中[○]学[○]校（5年制）と、女子の[○]高[○]等[○]女[○]学[○]校（5年制）はいづれも^{セカンドリー・エジュケーション}中 等 教 育の学校であり、しかも実際には、男子のそれは、「[○]中[○]学[○]校」と呼ばれ、女子のそれは、「[○]高[○]等[○]女[○]学[○]校」と称されながら、^{ワリキョウ}実際のレベルは、又、教科課程は、前者の方が後者より、一般的に言って高い面もあった事を知れば、我々は、言葉の魔術、トリックにだまされていたとも言えましょう。即ち、高等女学校であるから、女性は教師になる

うと思っていた人以外は、受けるべき教育はそれで充分であると考えていたと憶測せざるを得ません。その名称が高等女学校なのですから、

明治10年以降、教育面で反動的になっていた事の裏には、一般人の女子教育への認識も不十分であった事もあり、又一面、当時の女子学生の中には、今日のいわゆる Women Lib を極端にふりかざして、「半男半女」の如き振舞があり、明治14年、東北地方のある学校を、当時の文部書記官、浜尾新が訪問した際、余りの事に、顔をしかめた程の女先生、女子学生があったという事で、一部には女性自身に責任があったと言えますし、又一方で一般人々は、明治政府の極端な進歩主義についてゆけず、「だから女には、高い教育はいらない！」という気分になり、単純になってしまい、又鹿鳴館——明治19年——22年——を中心とする、いわゆる High-brow な婦人達が一般人の反感を買う事もあり、又キリスト教徒を中心とする宗教団体の教育界に於けるめざましい活動に対して、神道、仏教徒系の一部の人達のねたみと対抗心と言ったものが、足をひっぱり、又キリスト教団と日本の国家主義が対立した事なども、反動の大きな部分にもなっていたと思われます。

ところで、日本では、旧制度下にあつては、尋常小学校以後の教育は、男子と女子の行くべき教育機関は、全く分離されており、いわゆる教師になる女性にだけ、官公立の学校への道が存在していただけで、高女卒業後は各々、師範学校、高等師範学校に行ったわけですが、これとても語学の教師の道は閉ざされており、もし語学を学ぼうとすれば、いきおい、民間人による私学の専門学校に頼る他なかったわけです。私立で、女子医専、薬専、美術学校、家政専門学校等は、殆んどみな、1900年以降に設立されたものであり、いづれもみな私立であった事は、日本政府が、当時の女子教育をどの様に考えていたかを、暗に、物語るものではないでしょうか。

津田梅子が明治33年(1900年)、当時36才で、女子英学塾を開き、1年遅れて、成瀬仁蔵が、日本女子大学を開設したのであって、この分野での官公立の学校が一つもなかった事は、女子教育史に於て、残念ながら、興味ある歴史的事実といわねばならないでしょう。

これ以前には、高等女学校迄のレベルでは、早くから、プロテスタント

系の女学校があり、当然、外国からの資金に依って建てられた学校であったから、いづれも「私立」であり、日本の明治初期以来の、女性の為の教育史を些細に調べると、実にこの外国人の宣教師達の努力に依る、いわゆるミッション・スクールが、全部でないまでも、その殆どが、大いに、日本の女子教育の為に活動してくれており、幸いにも、そのいづれもが、教育に、私心を持たない情熱を注いで、尽してくれたと申しても、過言ではありません。

勿論、時を経るに従い、民間人で、良妻賢母型の家庭的婦人を養成する学校で、勝れた私立の女子校がありました。が、数から言うと少なく、前述のミッション系の学校が、教育的に高いレベルを示しており、明治政府が怠っていた面を補い、女性の為にも、語学に強くなる教育が与えられ、高い水準を示していたわけであり、こうした歴史的背景があった事を忘れてはならないと思うのです。

16世紀に、日本に南蛮文化をもたらしたのは、南欧のカトリックでしたが、近代日本にキリスト教をもたらしたのは、アメリカ系のプロテスタントセカンダリーエグゼクシジョンであって、この系統の学校は、明治初年から、中等教育のレベルで、高等女学校にも、多大の影響を与えているのです。カトリック系の学校は、プロテスタント系よりも、少し遅れて、日本に入ってきています。これらミッション系の学校の特色は、専門学より、一般教養、特に精神的な面を重要視した点にあり、ここから、宗教、文学、教育の世界で活躍する多くの人材を輩出したのは事実であり、日本の女子教育史をひもとく時、ミッション・スクールが日本の女子教育に果たした功績は、計りしれないものがあります。

派遣されてきた外国人教師が居た所では、学生の語学力が非常に高く、それらの学校の卒業生の回想録には、「1日中英語で授業を受けた」とか、「シェイクスピアを原書で読みつくした」とかの言葉があり、恐らく、名称は、唯の明治女学校でも、今日の大学生より語学力ではまさっていたと思われるのです。当時の女子教育としては、最高のレベルに達していたと思われる。近代女子教育史上、明治初期のキリスト教系の女学校は、これを欠いては、語れない程の重要性をもっているわけです。

明治政府は、その初期に於て、女子教育に意欲を燃しながら、長期に亘る、はっきりしたその Vision (ヴィジョン) をもっていなかったと言える

でしょう。明治10年代の、官公立の女学校の後退には、次に述べる様な、与論の背景があったのです。

例えば、文明開化の第一波が高潮した明治5年頃、当時の新聞、雑誌などに次の様な事が書かれています。

「大帯の上に、男子の用^{あしだ}ゆる袴^{たかげ}を着し、足駄、高下駄をはき、腕をまくり上げなどして、洋書をひっさげ往来する」(明治5年3月新聞雑誌35号) 女子洋学生が現われ、「おなごながらも、まち高袴、肩で風切る日曜日」

(明治7年開化六歌仙)などと、ひやかされ、まじめ論者、識者からは、風俗を乱し、「女学の本意を失いたる一端」(明治14年、10月3日 東京日日)と決めつけられていました。こうした蛮カラ女学生は、明治14年頃には、東京ではなくなっていました。地方には蔓延していたのです。浜尾文部権大書記官が東北諸県を巡回した時、山形県の女先生、女学生が「半男、半女の風態で、意気揚々、生かじりの男女同権論」をふりまわしたのを、「だから、心ある者は、女子を学校へ出すのをきらい」、女子の就学率が上らないのだと、当時の東京日日新聞は、その論説に於て述べています。

当時の英学と、蛮カラ女学生と、女学校不振を一つにまとめてしまう事には、無理がありましたが、世評というものは、往々にしてそういうものであらうと思われまふ。生意気な娘が、たまたま英語を話すから、新しい女学校を誤りと断じ、英語教育と結びつけて、これを非難したものであらうと推察されます。かくして、明治10年代の官公立の女学校の後退には、かかる与論の背景があり、それがやがて、女子の為の最高教育機関たる男子と同じレベルの官公立による女子大学が、教師養成の師範学校、高等師範学校だけに限られ、しかも、「語学」を除くというものに絞られてしまったわけです。

明治12年の教育令は、現実の国民生活に学校教育を合わせようとしたものでありますが、今度は、その国民生活に合わせるという現実を重んずるの余り、これまで努力してきた新しい時代の教育精神を失ってしまったわけであります。尋常小学校に於てすら、学制実施期間を通じて、女子の就学率が低かったという事の一つの大きな理由は、小学校の教科目が、国民の生活と遊離していた事、例えば、裁縫、家庭科などの科目に欠けていた事など……なのですが、東京、青森、高知などでは、裁縫科を加えて、国

民生活の実状に合わせようとしていました。かくして、教育面に於て、明治政府は、その始めの理念を失ってゆき、積極的な女子教育の推進の気迫はうすれ、男女共学、男女平等の教育内容から、程遠い、男女別々の教育体系へと進み始めていたわけで、それが、旧制度下の一般の教育のあり方であり、昭和22年（1947年）日本敗戦後の教育新制度に変わるまで、尾をひいたわけです。

この間隙を縫う如くに現われたのが、ミッシン系に依る私立の女学校であり、又津田梅子や成瀬仁蔵による、私学の、英学を中心にした学校が生れざるを得ない情況、事情があったわけです。

あらましではありますが、以上の様な、特殊な、異常な情況が、何の疑問ももたれずに昭和22年迄続いたという、日本に於ける女子高等教育制度のあり方を、はっきり認識しない事には、その発展史を本当には、把握出来ない様に思われます。

今日の日本はGNP世界第3位の国とされていますが、女子教育の問題に関しては、ついこの間まで、その後進性を内蔵していたと言わざるを得ません。従って、日本に於ては、宿命的に、歴史的に女子の人材は、語学教育を受けてきたものが圧倒的に多かったという事実です。優れた学生を集め得た所は、いきおい、語学中心の学校であったわけです。終戦直後から、数10年に亘って、社会的に国際的に、活動できた人々と言うのは、語学を中心に学問をして来た人に多かったという事です。

教育に男女の区別をつけず、全く平等の機会を与えてきたアメリカでは、必ずしも、語学に強い人のみが、社会的に活躍してきたわけではなかった事情を知る時、その違いが、はっきり認識されるのです。

昭和22年に発足した教育制度下では、35年も経過した今日では、その事情は勿論、変わってきています。女子は、その意志と、才能、実力さえあれば、今や誰でもどの分野に於ても、社会的に、活動する機会があるわけなのですから。

熟してきた教育新制度は、然し、今後、どの様な歩みを続けるべきかという課程は、多々ある様に思われます。問題は女子高等教育のみにかかわってはいられない、低学年の学生の問題にかかわってきており、小、中、高での問題に、今や多くの難問が押し寄せてきています。全般の学校教育、社会教育、家庭教育が問われています。然し、これは、現在の私の論題と、

焦点を異にしているので、この問題は又の機会に譲りたいと思います。

私の言いたい事は、教育新制度となっても、女子の高等教育が、必ずしも、旧制度下のそれより、充実してきておらず、何がなし、改悪の感じが、いameないのは何故であろうかと言う事です。成るほど、どの分野でも男女の別なく、機会を与えられながら、密度の低いものになってきています。活動域は、拡がりながら、求めに応じられる程のものになっていないのは、どういうわけであろうかと考える時があります。

専門的なものを、もっと基本的な、集中的なものに修正して行くというテクニックな面と同時に、もっと精神的な面を与える必要があるのではないかと思うのです。今日の大学で、欠けているものは、精神面の教育ではなからうかと思ひます。今日の大学では、それが完全に欠けている様に思われるのです。時代の求めに応じようとする心が急な余りに、人間的な精神面の教育を与える事を忘れてはいないのだろうか？

学校は、知識を与える場であるのみならず精神を豊かに伸ばす場でなくてはならない。この当然の事が、忘れられてはいないであろうか。人間の根本にかかわる問題はくりかえし、くりかえし啓発されて、すぎることはなく、心豊かな人間形成の場であり、適応性に富む柔軟性のある人格をきづきあげる基本を与える場であるべきと思うのです。平凡な事ではありますが、健康な心とからだを築き上げる場であり、それらを伸ばすメデァとして、学んで行く姿勢を学生に与える場であって、知識の切り売りの場であってはならないと考えます。教育は一貫して、種を蒔くところなのです。それがやがて、家庭で、社会で、世界で美しく花開く、そのたねをまく場であると考えます。たねがまかれ、やがて自然に自分の力で伸びて行ける力の根源を与える場であると考えます。津田梅子は、「語学」を通して、精神の豊かな人間を造る事を念願とした教育者であったと思うのです。

オフィス・オートメーション(OA), ワード プロセッサ(WP), とタイプライティング

井 口 美 登 利

は じ め に

“オフィス・オートメーション”ということば、および、その略称である“OA”に対する関心が、わが国でも大きな関心を集め、いたるところで語られるようになってからすでに久しい。ところがOA自体についての一般的な定義あるいは統一概念といったものがはっきりしないままに、OAブームはいよいよ加速されて今日に至っている。わが国の場合を考えれば、どうやら、そこに明治以来の外来語信仰の影が見られなくもなかりう。“事務機械化論”という講座が大学に設けられてからでも、数十年は経過しているのである。

第一次・第二次の産業革命を通じて、先進諸国では、工業生産部門における労働生産性が著しく増大した。技術革新はさらに、コムベア・システムからオートメーション、はては産業ロボットへと進んで止まるところを知らず、省力化の徹底は完全な無人工場の出現を可能とするかも知れぬほどである。ところが事務部門の機械化と合理化は、はるかに立ち遅れていたのである。しばしば引用されていることであるが、アメリカ合衆国における1960年代の生産性向上比率は、生産部門83%に達したが、事務部門では僅かに4%に過ぎなかったという調査結果にしても、それほど誇張されたものではなかりう。

工業化社会から高度工業化社会へと進み、さらには脱工業化社会あるいは情報化社会への道を取るにつれ、事務部門に対する負担もまた量的・質的に大きく増加するのは当然の推移である。オフィスに受け入れ、処理し、保管し、伝達する情報の量は飛躍的に増大し、従来の技術と方法だけでは到底消化しきれなくなってくる。このうち数値情報については、早くから計算機が導入されていただけに、マイクロ・エレクトロニクス技術の飛躍

的発展にともない、各種各規模のコンピュータが有効に活用されてきたといえよう。“同じ性能を持つコンピュータを作るのにいまや大きさは数十分の一に、費用は数百分の一になった”ということばは、技術革新にともなうコンピュータ普及の状況を明快に示している。情報の伝達あるいは広く通信の部門においても、主として電話回線を活用した多重通信技術の開発は、まずは増大する通信量と高速化の需要に応じており、通信衛星や光ファイバー通信によって開かれる新しい技術的可能性は今後とも充分に期待できるものである。

ところが、非数値情報の処理、とりわけ、文書の作成と処理に対する合理化は著しく立ち遅れていた。わが国の場合には、“漢字仮名まじり”文という、いわばアナログ(表意文字)とデジタル(表音文字)を並用する特異な表記方法からして、諸外国に比らべ、合理化の上で大きな制約を荷っていたのである。欧米のオフィスでは早くから——すくなくとも自分が書いて自分が見るメモの類を除いては——ハンドライティングの文書は姿を消したのに、わが国でそれを果たそうとするのには大きな負担が必要であった。収容字数の余りにも多い邦文タイプライターに欧文タイプライターなみの機能とりわけスピードを望むことは所詮無理というものであり、カナタイプライターの応用範囲は、せいぜい一定の伝票処理ぐらいのところである。そもそも外国のオフィスにおけるタイプライター導入の第一理由が“ハンドライティングよりも数倍のスピードで文書を作ることができる”という事務機械化の本旨にかなうものであったことを想起すればよい。文書を読み、理解し、処理し、対応するためのスピードとなると、これは計量化が困難であるけれども、ハンドリトン文書とタイブリトン文書との間に大差のあることは論をまたぬ。オフィスにおける事務生産性は、今日喧伝される新鋭OA機器の導入を別としても、わが国では、従来の状況を見れば、諸外国よりも、格段に低かったといえるのである。その最大の原因は、非数値情報の文書作成のための労働量に大差があったからである。

こうした背景を考えるならば、わが国でオフィス・オートメーションOAが語られるとき、必ずやワード・プロセッサWPが引き合いに出されるのは、むしろ当然の帰結であるかも知れぬ。

竹内均氏の“・・・日本の知的生産者にとって、昨昭和56年(1981)は

うれしい年であった。充分な機能をもったワードプロセッサがてごろな値段で手にはいるようになったからである。・・・ワードプロセッサは弘法大師によるいろは48文字の発明に比べられるほどの大発明であった。”

竹内均,「刊行のことば」, 竹内均(編), ニュートン別冊『ワードプロセッサのすべて』, 1982年5月, 教育社6, 7ページ。

という表現も理解できようというものである。

けれども, OAすなわちWPといった短絡的思向はこれとは別物でありもとより, 戒めなければならぬ。OA業者の無責任なセールス・トークや, 本質的に誇大であることの多い広告コピーのトリックに乗せられてはなるまい。

OA と WP

いわゆるOA機器なるものを, その用途別に分類すれば, およそ次のようになるであろう:

計算, データ処理のための汎用コンピュータ, オフィス・コンピュータ(オフコン), パーソナル・コンピュータ(パソコン), さらに
は電卓の類

文書処理のための, ワードプロセッサ, イレクトロニックおよびイレクトリックタイプライター(わが国の場合では, 外国語, 主として英語用のものと, 日本語用のもの)

文書伝送のための, ファクシミリあるいはファックス

文書処理と伝送を兼ねるものとして, テレタイプライター, テレックス

文書複写のための, 感光紙および普通紙複写機(後者, いわゆるPPCが主流)

ここでOAの定義を考えるならば, 現段階については, 取りあえず,

“オフィスに特定の機器を導入して, 事務作業を効率化・合理化することにより, 事務生産性を向上させること”

としておく。定義とりわけ学術用語としての定義とはまことに面倒なものであり, 伝説としては, “PRパブリック・リレーションズ”に対する定義がアメリカに687以上あるという話が挙げられるが, この“以上”というのは, ある学者が数えているうちに, あまり多すぎるので, 687 までで

諦めたからだというオチがついているほどである。

WPに対しては、日本事務機械工業会は次のように定義している：

“ワードプロセッサとは、文章の入力、記憶、編集および印字の基本機能を有し、文書作成の効率化を主目的とする装置（汎用電子計算機と接続して使用するものを除く）をいう。”

これよりはアメリカの Word Processing Institute のデフィニションの方がさらに適切であろう。すなわち：

The application of computer technology and systems management techniques to the typing process としているのである。

汎用とよばれる大型・中型のコンピュータだけでなく、最近はオフィス・コンピュータ（オフコン）やパーソナルコンピュータ（パソコン）にも文字処理機能を備えたものがあり；さらには上級のエレクトロニック・タイプライターにはディスプレイ装置とメモリー装置を持ち、単機能的な小型ワードプロセッサとしての使用が可能な機種もあるから、定義には限界あるいは例外が生じてくる。

さらにまた、WPには文書の作成に止まらず入力したデータの保存と蓄積、そして検出と再生の機能があるうえに、計算や作表の機能を持たせることも容易であるから、OAシステムの中核となるオフィス・コンピュータとしての性格を持っているとも考えられる。いずれにせよその構成は：

- (1) 入力部であるキーボード
- (2) 表示部となるディスプレイ装置
- (3) 記憶部となるフロッピー・ディスク装置
- (4) 出力部であるプリンター装置
- (5) 以上をコントロールする中央演算処理装置（セントラル・プロセッシング・ユニットCPU）

から成っている。このうち(1)と(4)だけを結べばイレクトリックあるいはイレクトロニック・タイプライターとなり；さらに簡単な(2)と(3)を加えて(5)を通し作動する表示／記憶装置つきの上級イレクトロニック・タイプライターも比較的低価格で続々と市場に出てくるようになった。もっとも、そのすべてがヨーロッパ語を印字する欧文／英文タイプライターであって邦文タイプライターではない。こと日本語に関しては、ワードプロセッサとイレクトロニック・タイプライターとの間にはまだ大きな懸隔があるようだ。

英文ワードプロセッサの入力部には、基本的にはタイプライターと同じ配列のキーボードが使用される。もちろん、WPとしての操作に必要な各種のサービス・キーが追加されるにしても、アルファベット、数字、パンクチュエーション、シムボルなどについては、イレクトロニックあるいはイレクトリック、さらにはマニュアルのタイプライターのキーボードがそのまま汎用できるのでから便利である。従って、マニュアルのタイプライターで基本技能を習得したタイピストが短時間の練習で容易にイレクトリック・イレクトロニックタイプライターに移行できるほどではないにせよ；すくなくとも、イレクトロニック・タイプライターに習熟したセクレタリーはきわめて短時間の研修を経てワードプロセッサを使い始めることができるはずである。（教育する側としては、すくなくとも簡単なディスプレイ装置と小容量ながら記憶装置を備えたイレクトロニック・タイプライターにより、タイプライティングの技能に加えてWPへの対応を考慮したカリキュラムを作成することが望ましい。こうしたイレクトロニック・タイプライターでも文書の入力・記憶・編集・出力といったWPの基本的操作を理解させることができるからである。）もとより、英文のWPそのものを、たとえ短期間でも実演操作させることができれば申し分ない。

日本語ワードプロセッサの場合はどうであろうか？ その入力部であるキーボードには次の種類がある：

(1) タブレット式あるいはペンタッチ式——

文字盤をライトペンでタッチして入力する方式であり、3,000ないし6,000余の漢字、平仮名、アルファベット、数字、符記号を配置した多項目シートにペンをタッチするのであるから容易ではない。邦文タイプライターの宿命である操作の複雑とスピード欠如の短所は補えない。

(2) カナ入力式——

カナ・タイプライターと同じキーボードを打つことにより入力し、これを自動的に漢字仮名まじり文に変換する方式である。キーの数はずっと少なくてよいが、カナ配列を覚えねばならない。カナ文字の数はローマ字より多いし、濁音・半濁音・促音・拗音を加えれば常用するキー数はさらに多くなる。

(3) 連想入力（コード）式——

漢字を連想により特定のカナ文字コード化して入力する方式で、速度は高くなるがコード記憶は容易でなく、用途は限られる。

(4) ローマ字入力式——

欧米タイプライターと同じキーボードにより、ローマ字入力すると、自動的に漢字仮名まじり文に変換する。カナ入力式と同じく、同意異義語に対する問題はあるが、カナ文字に対してローマ字の方がずっと少いうえに、欧米タイプライティングの技能があれば高速度での入力ができる利点がある。

この(4)のローマ字入力式の日本語WPにあっては、英文タイプライティング履修者は大いに有利であるが、そのほか、英文WPの場合と同様に、WPとしての基本操作についても、さきに述べたディスプレイ／記憶装置つきエレクトロニック・タイプライターによるWP入門のコースは有用である。

いずれにせよ、日本語用のものを含めて、これからのWP入力部はキーボード方式が主流であり、WPのオペレーターはまずもって英文タイプライティングの技能を修得しておくことが前提条件となるといってよい。こうした大勢に対応するためには、タイプライティング教育のあり方についても、学ぶ側だけでなく、教える側もともに、新しい視座と取り組み方が必要となってきたように思うのである。

TYPEWRITING VS HANDWRITING

広く社会生活の万般における礼儀作法のあり方につきそれぞれの、TPOに応じて懇切丁寧な解説を加えた指導書として定評のあるロングセラー“ETIQUETTE, The Blue Book of Social Usage”の中で Emily Post 女史は次のように述べている。

First of all, typewritten letter is not only proper, but also preferred for all personal letters of any length. Yesterday's objection to the typewritten personal letter was the result of the practice of dictating such letters to a secretary of stenographer. But now, when almost everyone can use a typewriter himself, the objection no longer holds, and the ease with which a typed page can be read is, for most of us, more than compensation for the loss of a handwritten letter that is

difficult to decipher.

1955年発行の Ninth Edition にちゃんと載っているのだから、かれこれ30年も昔のことである。このころからすでにアメリカでは、こうした考え方が主流になっていた。どんなに心をこめてペンを走らせたとしても、読み易さの点からはタイプライターにかなわない。読み手——あるいはもっと広くコミュニケーションの受け手——に余計な負担をかけないようにすることは、礼儀に叶うことでこそあれ、もとるところはないというわけである。たとえば憧れのスターに捧げるファンレターだって、幼児かよっぽどのお年寄りが書き手でない限り、きちんとタイプライトするのが今や常識とされているのだ。もっとも、これがラブレターともなればどうだろう？ このあたりは、パーソナル・コレスポンドンスにおけるタイプライティングの限界であろう。それにもうひとつ、旅先から出す絵葉書の便り、いくらホテルやユース・ホステルで気軽にタイプライターが借りられるからといっても、こたまたハンドライティングが似合う部類の音信であると申せよう。

さて、オフィスから出し、オフィスで受けるビジネスレターともなればこれにはもう、ハンドライティングの入り込む余地はなくなる。ちなみに Business Letter とはなにも会社の“商売の手紙”に限ったことではない。お役所・学校・研究所などの各種団体を含む、およそ“仕事”に関する書信全般をいうことはもちろんである。昨年訪米中の鈴木首相(当時)の動静をいささか皮肉まじりに報じた New York Times の記事に Suzuki Mixes Business With Business と見出しがつけてあったが、business には広義の“仕事”と狭義の“商売”の両方の意味があることがよくわかると思う。

レターだけではない、レポート、メモランダムの種類をはじめ、一定の書式と文言を備えた定形文書 Business Form はもとより、およそオフィスで扱うすべての文書をタイプライトするのが当然の約束ごとである。そして、この場合ただひとつの例外は“署名”であるが、そういえば、ひところアメリカの大学の入学願書 Application Form には1ページ目の上部に

All blanks should be filled in by typewriter except signature.

と印刷してあったものだ。最近ではこうした“注意書”を見ることは少くなったが、それは改めてことわるまでもなく、しごく当たりまえのこととして広く理解されるようになったからである。

とにかく、パーソナルであるとビジネスであるとを問はず、およそコミュニケーションの“受け手”に読んでいただくという文書を書くときには、ハンドライティングでは通用する場合のきわめて少ないことを知らなければならぬ。

MERIT OF TYPEWRITING

(1) タイプライティングのメリットは、なによりもまず、そのスピードに帰せられる。電動・電子タイプライターではそのメカニズムから1秒に最高15字も打ち出す性能があり、たとえ手動のポータブル・タイプライターであっても、腕前さえしっかりしていれば、秒速12字ぐらいまでは打てる可能性があるのである。このスピードはハンドライティングの遠く及ぶところではない。文書を作るための時間を大幅に短かくする、あるいは、同じ時間内に作る文書の量を飛躍的に多くすることは、家庭にあっては一層の余暇をうみだし、オフィスにおいてはそのまま事務能率の向上に大きく役立つ。

読むスピードの方も忘れてはなるまい、これは数量的に比較するのは困難であるが、たちの悪いハンドライティングを“解読”する苦勞はたいへんなものだ。平均的な日本人の書く、まことに子供っぽい英語のハンドライティングはご愛敬だが、まずまず組みしやすく、それほど問題はなかろう。ところが外国人の達筆・乱筆ともなれば、まったくもって手に余るたぐいのものが多いのである。とりわけ固有名詞、算用数字となってくると、とても判断のしようがないケースも出てきて、これではどうも仕事にはなりかねる。もっともハンドライティングは不確かなスペリングをごまかすのには都合がよいかも知れず、ie だったのか ei だったか、はっきりしていないときなどは、丸めるような丸めないような書体で2字続けて書き、そして place a dot on between という手がある由だから、恐れ入ったものだ。タイプライティングにはそうした心配は不要であって、s か c か、1 か 7 かに迷うことはもうないわけである。

読み書きともに Less time——これはタイプライティングの持つ最大の利点である。

(2) タイプライティングのもうひとつの効用はユニフォーミティ——均一で規格のそろった綺麗な字が書けることにある。日本語には原稿用紙という便利なものがあるが、英語のハンドライティングでは字数・語数を計算

することは困難であろう。タイプライターでは1インチの長さに10字書ける Pica と12字書ける Elite (最近の電子タイプライターでは15字書ける Micro も加わったがまだそれほど普及していない) の2種類の規格に統一されているから、字数・語数を計算したり、指定することが容易にできるのである。英語では5字を1語として換算すれば、実用上、実際の語数と大差なくなる、レターサイズかあるいはA4判の用紙にダブル・スペーシング(行間を1行分あけて打つこと)でタイプしたレポートやシーシスの1ページにはおよそ300語入ることになる。上下左右の余白に一定の約束があるから、たとえば卒業論文の最低枚数を指定したり、学会の研究報告要旨の最大語数を制限することも、タイプライティングを前提として可能となるのである。よく外国のニュースで、“15万語に及ぶ意見書の中で・・・”などといっているのは、この1ページ300語の割合で計算することが多いのである。

そしてまた複写、ステンシル、軽印刷など同一の文書を複製する場合はもとより、テレファックスのように文書を電送するためにも、タイプライティングにより得られる読み易さと均一性は大いに有利な条件となることは論をまたない。以上の TYPEWRITING の Merrits はそのまま、OFFICE AUTOMATION の趣旨に叶うことになろう。機器の導入による効率化と事務生産性の向上である。

HOW TYPING IS LEARNED AND WHY

英文タイプライティングを学ぶためのエッセンシャルな条件は、なによりもしっかりとした英語の基礎学力を身につけていることであり、生きた英語の学習に対する志向、あるいは意欲を持っていることである。とかく器用・不器用とか、運動神経にあまり自信がないなどという人があるが、そんな心配はまずもって無用のことだ。平均的な日本人の手先・指先の器用さは世界に冠たるものがあり、交通ラッシュの都会生活の中を生き抜いていること自体、たいへんな運動能力と反射神経を持ち合わせているのだから、まずは大いに自信を持ってよろしかろう。タイピングを習ってみたけれど、モノにならなかったという場合の95パーセントは、英語力の不足に原因のあることを知るべきである。

一般に、英語を話し英語を読むときよりも、英文を書くためには、一層

広いボキャブラリーと確かな文法の知識を必要とする。それも、いわゆるショートアンサー式の受験英語では疎外されがちな、パンクチュエーション、キャピタリゼーション、数字の用法（ワードで five と書く場合と、フィギュアで5と書く場合の区別）、アプレビエーション、コンパウンド、シラビケーションなどの原則を充分にわきまえて、実際の場合における適切な対応ができなくてはならない。英語を母国語とする国でのタイピングのカリキュラムには、こうした Basic Language Technicalities の確認と演習が含まれていることを申しそえておきたい。たとえば“セミコロ”はどういうときに使うのか、用法に応じた諸原則を例文をあげて説明することができるだろうか？ “ピリオド”よりは弱く“カンマ”よりは強い句読点・・・”などというようなゴマカシでは役に立ちませぬ！

スペリングや意味の不確かなワードについては辞書を引くのが常であるように、文法やスタイルの問題に対しても、手間を惜しまずに、まめにハンドブックやレファレンス・マニュアルを使いこなす心掛けが大切である。ビジネス・ライティングのためのマニュアルとして定評のあるのは：William A. Sabin, **The Gregg Reference Manual**, Fifth Edition, Gregg/McGraw-Hill.

一冊を手もとにおいておくことを勧めたい。

ひところ“指先から覚える英単語・・・”というキャッチ・フレーズに始まる、国産タイプライターのコマーシャル・メッセージを聞いたことがあるが、このコピーを書いた人は、失礼ながら、タイピングをご存知なかったにちがいない。そもそもタイピングを通じてワードのスペリングを覚えようなんて発想は、まったくのナンセンスである。話はまさに逆であろう。スペリングも不確かなワードや、意味も定かでないフレーズやセンテンスを、まちがいをなくタイプできることの方がよっぽど不思議というものだからである。

言語学習のプロセス

チョムスキーによれば、人間の言語学習のプロセスは、(1)アイデンティフィケーション、(2)フュージョン、(3)オペレーションの順に進むものだという。タイプライティングの学習もまた、こうしたステップを踏むといつてよいであろう。どの指がどれどれのキーを打つかを覚える段階は、1対1

の対応であるからアイデンティフィケーションに相当する。1つのキーからは1つのアルファベット（シフト・キーによりキャピタルとスモール・レターに切り替えられる）あるいはパンクチュエーション、フィギュア、シンボルしか出てこない。これが一定の意味を持つためには、まず複数のアルファベットを組み合わせたワードにしなければならぬ。（冠詞のaや代名詞のIなどのワン・レター・ワードは稀な例外だが——）この段階は、さしずめ、フュージョンである。“読む”場合と同様に“書く”場合にも、英文のミニマムなユニットはワードであって、レター（アルファベット）ではない。タイプライターで書く場合にも、まさにそのとおりである。ワードをいちいちレターに分解して打つようでは、とても仕事にはなりかねる。たとえば英語でもっとも使用度数の高いワード the を打つのに、ファースト・レターがt、セカンド・レターがh、ラスト・レターがeと分解して、1つずつ拾って打つのではないのだ。全体としてthe というワードを打つような練習が必要になるのである。これはハンドライティングの場合を考えればまずは明らかであろう。まさかthe はt-h-eというスペリングだから、まず最初にtを書き、次にhを続け、それからeで終わるというようなことを意識しながら、このワードを書いているだろうか？

TYPEWRITING VOCABULARY

スピーディでアキュレイトなタイプライティングを実現するためにはアイデンティフィケーション段階の練習を終わったあと、いきなりセンテンスを打つような冒険をいたさぬものだ。そんなことをするから、アルファベット分解型のムダの多いタイピング・ハビットが身についてしまうのだが、次なるフュージョン段階の練習、すなわちアルファベットを意識せずに打てるワードの数を多くすること—タイプライティング・ボキャブラリーを着実にふやしていくための練習に取り組むことをすすめる。それには使用度数の高いワードを優先して、練習の対象を選ぶことを配慮したい。中学校の英語教師になってプリントを作る場合を除いては、apple, baby, cat, dog, elephant, goose といった類のワードを打つことはほとんどないはずだから、こうしたワードはまず敬遠する方が賢明というものであろう。

ではタイピング・ボキャブラリーはどのくらいの量を必要とするであろ

うか。読み・書くためのボキャブラリーを、ある程度、広く深く持っているということを前提条件とすれば、それほど多くを必要としないものである。センテンス練習に入るためには、まず100ワード、パーソナル／ビジネス・レターやレポート／シシスの作成といった、プロダクション・プラクティスの演習——これがチョムスキーのいう“オペレーション”の段階に入るのであるが——に取り組むには500～800ワードがアルファベットの意識なしに、ワードとして確実に打てるようになっていれば充分であると申せよう。

タイプライティングではハンドライティングと違って、左右の手と、それぞれ5本ずつの指の組み合わせによるレター・コンビネーションの難易度という要素が加わる、たとえば the というスリー・レター・ワードは：左手・右手・左手と交互に打てるきわめて有利な組み合わせであるが、同じスリー・レター・ワードであっても、これが you となると：右手・右手・右手と片手打ちの連続する不利な組み合わせになっているのである。こうした条件のちがうワードを同じスピードで打とうとするのは不合理ではなからうか、アルファベットに分解して、letter by letter に打つという原始的なやり方からは、等間隔の雨だれ打ちにしかならない、“一定のリズムで打ちましょう”などという誤った指導をしている独習書のあるのは、どうにも困ったものである。

もしも the と you との効率的な打ち方を、音符で表わそうとするなら、the は  であり、you は  となるわけである。ワン・トゥ・パンチの方が、ライトあるいはレフトのダブルパンチよりも、ずっとスピードのあることは自明の理であろう。一定のリズムで、つまりは等間隔のピッチでセンテンスを打つことは非効率というものである。スピードの出る車と出ない車とをならんで走らせるためには、遅い車のペースに合わせて走るほかはないから、スロー・ダウンは避けられず、交通渋滞を生じるのは目に見えている。

ACCURACY

“速く打てるワードは速く打つ；無理のできないワードはそれなりに打つ。”これが理にかなったスピード・タイピングのセオリーでありテクニックである。なにしろ、ハンドライティングよりも時間のかかるタイプライ

ティングであつたら、**“宝の持ちぐされ”**というところであらう。しか
ばアキュラシーの方はどうか？あまり速く打とうとしてエラーだらけで
はしかたがないと考えるむきもあるかと思う。これにはタイピングを自転
車にたとえて説明すればよいのであらう。自転車を倒さずに走らせるため
には、どうしても一定のスピードが必要となる。極端な場合を除いて、一
般にスピードとアキュラシーとは立派に両立できる要素を持っており、決
して相反するものではないのである。

ところで、ロングワードともなると、ひとつのワードの中に速く打てる部分とそうでない部分のあることがある。たとえば answer のじょうずな打ち方を音符で示すなら、となるであろうし、credit は になり、service は と打つ。

レター・コンビネーションの難易度をきめる要素は、ただに片手打ちか両手打ちかだけではない、人さし指・中指の方がくすり指・小指よりは強い指であり、片手の連続打ちにしても、別の指で二度打つときと同じ指で同じキーを二度打つときとは難易度にちがいがある。同じ指で別々のキーを打つのはさらに容易ではない。たとえば左手の連続打ちで er とか te と打つのはまだよいとして、これが ce となれば同じような打ち方では無理になろうというものだ。

ワードだけではなく、使用度数のずばぬけて高いサフィックス、たとえば tion や ment などは、早目にタイピング・ボキャブラリーの中に加えておきたい。このうち ment はいちおう左右交互に打てる組み合わせになっているから良いのだが、tion は左・右・右・右となっている。けれども、これを ffff と逃げずに、できれば ffff と打てるように、練習量をふやしてでも、速い tion 打ちをモノにすべきであろう。ポイントは右手首の速いスナッピングを使って ion を乗り越えることにあるのだが、エレクトリック／エレクトロニックタイプライターでは、こうした場合にはいくらか有利なメカニズムになっていることは事実である。

マニュアル・タイプライターに限っていうならば、中にはbyのような、特別の注意を要するワードもある。左手の人さし指と右手の人さし指の連続打ち、まさに絶好の組み合わせと思って、これを  と勢いこんで打とうものなら、まずタイプ・バーがもつれるか、キー・トップが沈んだ

まま戻らなくなって、いわゆる jamming の状態となる、ときには打ったはずのない bb が印字されたりしてびっくりするものだ。これはタイプライターのメカニズムから来ることで、by は ff とカットして打たねばならぬ。そんなはずはないと無理おしをすれば、タイプライターの故障や不調の原因ともなりかねないから気をつけることである。

さて、タイピングのボキャブラリーはさしあたり 500 ワードから 800 ワードあればプロダクション・プラクティスの進行に足りると申したが、現実これだけのワードに限って、これを組み合わせたのでは、とても生きたおとなの英語を書くわけには参るまいけれども、いったん身につけたベーシックなタイピング・ボキャブラリーはその大幅な発展と応用とが可能なることから、800 ワードはその何倍かに発展できるのである。これは語源・意味・用法からする類語・派生語だけではなく、タイピング・テクニックによる類語について活用できるということである。スペリングの上からは似かよっていて、使用度数もほぼ等しい動詞 make と take とについて考えてみよう。前者の打ち方が ffff であるのに対して、後者は ffff となり、はっきりしたちがいがあって、まったく別種のワードであることがわかるはずである。ところが、make と同じ音で打てるワードには lake があり、take ともなれば、bake, cake, fake, sake, wake がほとんど同じテクニックで打てるのである。こうした例はまだいくらでもある。

たとえば eight は ffff で、その同類は fight, right, sight, tight とならび、延長線上には weight, freight, straight, がある。一方 light は ffff と打ち、仲間には night, might があり、発展させれば flight, knight が出てくるといったようなのである。

こうしたテクニック・スタディの地道な積み重ねを通じて、豊富で応用のきくタイピング・ボキャブラリーを作り上げることが、チョムスキー理論にいう“フュージョン”の段階である。これはセンテンスを打ち、プロダクション・プラクティスに進む“オペレーション”の段階に入った後にも、絶えず心がけてポリッシュ・アップあるいはブラッシュ・アップすべきものであることを忘れてはならぬのである。

タイピングの自習・独習が効果をあげるのは、ほんとうは“フュージョン”と“オペレーション”の段階であろう。“アイデンティフィケーション”を効果的に習得するためには、適切な指導を受けることがなによりで

あるからである。時間に制限がなければ、それこそ試行錯誤のくりかえしで、やがて無駄のない合理的な打ち方にたどりつくこともできようが、短期間で“アイデンティフィケーション”(Mastering Alphabet Keys, Punctuations, Figures, and Symbols)の段階を乗り越えて、“フュージョン”(Word Study, Word Combination Exercise, Short Sentence Exercise)に入り、次なる“オペレーション”(Production Practice : Personal/Business Letter Typing, Tabulation, Report/Thesis Typing, Forms Typing)演習に進むための素地を身につけるための条件とアドバイスは次のとおりである：

(1) 練習に使用するタイプライターについては、インストラクション・ブックを読んでその操作を完全に理解するか、あるいはディーラーまたはユーザーから直接に指導を受けて、疑問の点のないようにしておくこと、エレクトリック／エレクトロニック・タイプライターの場合には、とりわけ、誤操作による事故をおこさぬように気をつけたい。“ビギナーが30日使えば、エキスパートが360日使うのと同じくらいマシンはいたむ”とは、なにも教習所の自動車だけではないことを知っておきたい。

(2) 親切にプログラムされたテキストを選ぶ。そして、練習プログラムの趣旨を理解したうえで、合理的な練習を一定期間、たゆまずに維持継続すること。それには、気の合った仲間をさそい、グループを作って、複数で始めた方が、一般に進歩の速いものである。一人よりは二人が、あるいは三人・四人という程度の共同あるいは競争学習は、それなりにグループ学習効果を期待できよう。

ELECTRIC/ELECTRONIC

エレクトリック／エレクトロニック・タイプライターとマニュアル・タイプライターとでは、タイピングのテクニックに相当なちがひがある。ひと昔まえには、電動タイプライターは高価なもので、オフィス・ユースに限られていた。今日では、パーソナル・ユースにも大きく進出することができるほどに、軽量・小型化が加速され、価格も従来のマニュアル・スタンダードと大差ないか、あるいはそれを下まわるほどになってきた。電源コードの要らないバッテリー内蔵式のほとんど無音で印字できるポータブル・エレクトロニック・タイプライターも発売された。こうなってくると、

初めから電動で練習するということも、確かにひとつの考え方であろう。

けれども、一般的に言えば、マニュアルで基本を習った人がエレクトリック／エレクトロニクに移るのは容易であるのに——30分で操作に慣れ、3時間で使いこなせるといわれるほどである——その逆は必ずしもそうはいかないのである。従って、基本練習はまずマニュアルで始める方法が無難であると申せよう。これからのオフィスでは、疑いもなくエレクトロニック・タイプライターが主流となろうが、それとは別に、軽量・小型のポータブル・マニュアル・タイプライターを1台手もとに持つていれば、大いに便利である。マニュアル・タイプライターを使って、均一な印字のノートな文書を作り出すことこそ、あるいは腕の見せどころであり、エリートな資格となるかも知れない。カー・ドライバーもベテランともなれば、オートマチックを敬遠して、フロア・シフトのマニュアル・チェンジを選ぶのと、同じようなことであろうか。

すくなくとも基本的な入門コースだけではちゃんとタイプライティング・スクールで懇切な指導を受けることが、もっともオーソドックスでインフェクティブな方法であるにちがいない。大学・短大でタイプライティングのコースが設けてあれば、もちろん、それにこしたことはない。いわゆるグループ学習の効果は、とりわけ、大人になってから始める基本練習の場合に大きく作用するからである。指導の方法が適切であれば、これをひとりでやったとしたら早速に退屈したり、途中でいい加減にほうり出したくなるような練習の質と量が、同じ目的を持つ仲間と一緒にやってやることにより、心理的にそれほどの抵抗なく受け入れられ、続けられるものだからである。

お わ り に

タイプライティング技能の修得は、タイプライティングだけに終ることなく、ワードプロセッサを初めとするあらゆるOA機器のキーボード入力装置の操作を可能とするから、これからの国際社会に生きる若人たちにとり、将来とも、ますます有用な、あるいは必須の資格であるということができよう。

タイプライティングの学習・指導には、人間の言語学習プロセスの段階に対応した取り組み方が有効であるが、それにはハンドライティングとち

がうキーボードの特性と、人間工学との関係を配慮した適切なプログラムと指導が必要である。もとより、英文タイプライティングであれば、英語の基礎学力、とりわけパンクチュエーション、キャピタリゼーションといった実際的な文法の知識を確実なものとするのが文書作成のための必須の要件である。ハード・ウェアだけでは役に立たぬ。そこにはこのハードを充分に動かすすぐれたソフト・ウェアがなくてはならぬ。またタイプライティングからワード・プロセッシングさらには広く国際的なオフィス・オートメーションとコミュニケーションを実現し推進するために望まれる資質であるにちがいない。産業ロボットが黙々と生産に従事する無人工場は、あるいは近い将来に出現するかも知れぬ。しかしながら、いかに合理化・自動化されようとも、オフィスにおいては、どこまでも人間が主役であろうからである。

教育・指導に当たる側としても、好むと好まざるに拘らず、今やホワイト・カラー部門にまでおよんできた機械化・自動化・省力化の波に対して無関心であってはなるまい。常に尖端の技術革新に関心と接触を保ち、近未来を見きわめながら、着実に現在をふまえ、なによりも新時代の状況に即応できる。あるいはすくなくとも自ら対応するだけの素地を学生に持たせることを目標に、日々これ新たなカリキュラムの編成と実践的指導に努力をいたすべきであると考える。

東京大学理学部情報科学科山田尚男教授のご教示によれば、1982年11月18日、ドヴォラク式キーボードがアメリカ標準規格に加えられた由である。Dvorak Keyboard の利点については、旧稿“Typewriting 教育法の研究その1—Typewriter の開発と Universal Keyboard の問題点”（東京立正女子短期大学論叢第2巻：1968年）において論じたように、人間工学的に見て、より速くより容易なタイピングを実現する可能性を持つ合理的なキーボードである。テクノロジーの発達に頼るだけでなく、こうした“人間”の側からする見直しの行われることは有意義であろう。

本稿における TYPEWRITING VOCABULARY および ACCURACY の項ともいささか関連があるので、ここに追記するとともに、山田教授のご好意に謝意を表する次第である。（1982年12月15日記）

『罐詰横町』について

——ドックとマックの人間像——

深 沢 俊 雄

(1)

Cannery Row (罐詰横町) は、スタインベックの第11番目の作品である。全体が32章からなるゆるやかな構成の長編小説で、『トーティヤ・フラット』と同じく、カリフォルニア州のモンテレイ市の罐詰工場街に生きる下層民たちをテーマにした物語である。

浮浪者の筆頭マック (Mac) とその仲間たち、中国人の食料雑貨店主のリー・チョン (Lee Chong)、生物実験所で海洋生物を研究している博士ドック (Doc)、清潔な淫売屋の経営者で慈善家のドーラ (Dora)、低脳児フランキー (Frankie) が登場して、奇想天外な事件を引き起こすが、ストーリーの中心になるのは博士 (Doc) からたのまれて、マックとその仲間たちが、蛙集めをやる件とドックの誕生パーティーである。

マックたちの醸しだす一つ一つの行動が、彼らの pathos と共に humorous に描かれ、序文で述べられているように、罐詰横町は作者の紹介によると、鰯の罐詰工場が立ち並ぶ一画である。そのあたりには、安酒場、食堂、売春宿、食料品店、実験所、安宿などが散在している。「淫売、ボン引き、ばくち打ち、宿なし」も、別ののぞき穴から眺めれば、「聖徒、天使、殉教者、清き人間」であるという達観が、スタインベックの根底にあるのかも知れない。そこで、主人公マックとドックを中心に、スタインベックの描く人間像を探ってみたい。

(2)

マックとその仲間たち〔ヘイズル (Hazel)、ラ・アイダ (La Ida) のバーテン代理を時々つとめるエディ (Eddie)、ヒューイー (Hughie)、西部生物実験所 (Western Biological Laboratory) のために時々蛙や猫を集

めてくるジョーンズ (Jones) など」は、リー・チョンの店の隣りの空地にあるさびた鉄管の中で暮らす明らかにたがのゆるんだ、世間の生きざまからはおよそ縁遠い一群の浮浪者である。彼らは社会の下積みで外見的にも恵まれず、しかもそれに満足している連中であり、『トーティヤ・フラット』のダニーを中心とするパイサーノ¹⁾の焼き直しと見ることもできよう。彼らは家族もなく、正業もなく、金もなく、ただ酒を飲んで仲間と乱痴気騒ぎをし、食べ物と飲み物とある種の満足以上には野心もないという共通点を持った一団である。

ダニーが祖父の遺産を譲り受けて、仲間のピロンたちをダニーの家に住ませたのと同様に、中国人の商店主リー・チョンが、借金の形にアベヴィル (Abbeville) という紳士から手に入れた漁粉倉庫を、マックがリーに掛け合って、倉庫を安全に護り家賃を払うという名目で借り受けようとする。

“I and my friends thought we'd ast you if we could move in there. We'll keep up the property,” he added quickly. “Wouldn't let anybody break in or hurt anything. Kids might knock out the windows, you know—” Mack suggested. “Place might burn down if somebody don't keep an eye on it.”²⁾

スタインベックは、リー・チョンを「老子 (Lao-tze) の引力によりその軌道に乗せられ、ソロバンとレジの遠心力で老子から引き離されているアジア的な惑星」と呼んでいる。リーもマックとその仲間たちの人間性を見抜き、次のような計算のもとに倉庫を貸すことにする。マックと仲間たちは、この倉庫を「御殿」と名づけ彼らの拠り所とする。

Lee considered. He knew it didn't matter what he charged. He wasn't going to get it, anyway. He might just as well make it a really sturdy face-saving sum. “Fi' dolla' week,” said Lee… (ellipsis)……

And that was the way it was. Everyone was happy about it. And if it be thought that Lee Chong suffered a total loss, at least

his mind did not work that way. The winndows were not broken. Fire did not break out, and while no rent was ever paid, if the tenants ever had any money, and quite often they did have, it never occured to them to spend it anywhere except at Lee Chong's grocery. What he had was a litte group of active and potential customers under wraps. But it went further than that. If a drunk caused trouble in the grocery, if the kids swarmed down from New Monterey intent on plunder, Lee Chong had only to call and his tenants rushed to his aid. One further bond it established — you cannot steal from your benefactor. The saving to Lee Chong in cans of beans and tomatoes and milk and watermelons more than paid the rent. And if there was a sudden and increased leakage among the groceries in New Monterey that was none of Lee Chong's affair.³⁾

とくに、ここにリー・チョンの商人らしい堅実な物の考え方や人間性が如実に表わされている。そして作者がリーをして一番言わしめたいのは、*You cannot steal from your benefactor.*（人はその恩恵者から盗むことはできない）ということであり、この作品の根底となる teleological thinking であると言っても極言ではないと思う。つまり、作者はこの作品で *Benefactor* ということを主眼としている。それがドックとドックを取り巻く人々、とりわけマックとその仲間たちの人間関係を支える柱となっている。ドックとマックたちは、この絆によって、打算的な考えを抜きにした人間らしい暖かな友情で結ばれている。

このことは、日頃マックたちが何かとお世話になっているドックに感謝するために、パーティーを開いてやろうとする言動からも明らかである。

And Mack said : "That Doc is a fine fellow. We ought to do something for him."⁴⁾

Mack nodded his head soberly. "That Doc is a hell of a nice fella," he said. "He'll give you a quarter any time. When I cut myself he put on a new bandage every day. A hell of a nice

fella.”

The others nodded in profound agreement.

“I been wondering for a long time,” Mack continued, “what we could do for him—something nice. Something he’d like.”⁵³

(3)

マックたちは、ドックに対して、感謝の気持ちを表わすパーティーを開くための資金集めに、ドックから蛙が3～400匹必要で、一匹5セント払うということを知り、蛙集めの仕事を請け負う。彼らはリーの店に行き、こわれた古トラックを、腕利きの職工である仲間のゲイ(Gay)に修理させるから貸してくれと頼んで承諾を得、ゲイが何とか車を修理して、マックとその一行は、カエル採集にカーメル谿谷へ出かける。一行がカーメルの丘(Carmel Hill)をどうにか登って、最後の一番険しい所にさしかかった時、エンジンが故障してしまった。ゲイが部品を買いにもどって行ったが、彼らはそれから180日間、彼の姿を見なかった。ゲイはいざこざにまきこまれて、サリーナスの刑務所に入れられてしまった。夜になってもゲイがもどらないので、代わりにエディーが部品をさがしに出かける。マックの一行は野宿をし、夜明け前にエディーがもどってきて、車を修理し、一行は再び出発し、カーメル谿谷に着くと車を降り、途中でひき殺した鶏などで料理を作り、空腹をいやした。

蛙捕りには夜がいいというわけで、マックの一行は、夕暮近くまで昼寝をし、夜になって蛙捕りをしようとするが、そこへ犬を従え猟銃を腕にかけた大男が現われ、「一体、君たちはここで何をしているのか。……ここには立札が立ててあるんだぞ。釣り、猟、焚火、キャンプ禁止だ。さっさと荷物をまとめてその火を消してここを出て行け」と警告された。しかしマックは少しもあわてず、相手が軍人あがりと見るや、しきりに大慰殿、大慰殿を連発し、「自分たちは、ある科学者が癌の研究をしているので、蛙を捕って手助けをしているのです」とまことしやかに述べ、男の連れている犬に初めて気がついたふりをして、如才なく犬のお世辞を言い、男が犬にダニがついていて困っているともらすと、すかさず手当てをしてさしあげましょと申し出る。大慰が、「わしの家のそばに池があるんだが、蛙が沢山いて夜も眠れんのだ……捕ってもらえればわしも有難い」と言う

ので、マックはチャンス到来とばかりに、大慰の要請を引きうける。

マックが犬の手当をしながら如才なく話すと、大慰も心を許して、わしの妻は政治に夢中でなどとぐちをこぼし始め、マックの一行は、大慰から酒を振舞われ、それから行なった蛙捕りは大成功を納めたのである。罐詰横町に数百匹の蛙を持ち帰ったが、ドックが出かけていて留守のため、マックはリー・チョンの店へ行き、25匹1ドルの割りで交換しようと持ちかけるが、リーはなかなか Yes, と言わない。そこでマックはドックのためのパーティーであり、リーもドックの恩恵を受けていることを逆手に取り、リーを説得し、2ドル分の食料品と蛙50匹を交換し、御殿（マックたちがリーから借りている倉庫）に帰り、彼らはドックのパーティーをいつ、どこで行なうか相談した結果、今夜、ドックの実験所で不意打ちのパーティーを開こうということに決まった。実験所には飲食物や、飾りつけの品々が運びこまれた。マックと仲間たちは、パーティーでドックが帰ってきた時一番喜ぶのは何か相談したところ「蛙」だという結論に至る。マックは問題がある場合には、蛙をリーに譲渡するという受け取りを書いて、荷箱に入った蛙を実験所に運び込み、パーティーの準備を整えた。しかし、夜がふけてもドックはもどらず、したがって仲間うちだけのパーティーになり、酒がまわり、騒ぎを聞きつけて、「ベア・フラッグ」から出て来た客たちも一緒になって喧嘩をし、主のいない実験所の中は、レコードをこわし、グラスを散乱させ、本棚の本をひっくり返し、部屋中が破壊されてしまった。

明け方になって実験所に帰って来たドックは、部屋中の惨憺たる様子を見て怒りに燃え、拳骨が空を切り、マックの口から血しぶきが上がり、前歯は折れた。ドックに制裁を加えられたマックは自分と仲間たちの非を充分反省し、ドックの制裁に対して一切抵抗はしなかった。マックは敬愛するドックに、自分の心情を次のように吐露している。

Mack looked at the floor and a drop of blood fell from his lips to his beer. He mopped his split lips again. "I and the boys wanted to give you a party. We thought you'd be home last night."

Doc nodded his head. "I see."

"She got out of hand," said Mack. "It don't do no good to say

I'm sorry. I been sorry all my life. This ain't no new thing. It's always like this." He swallowed deeply from his glass. "I had a wife," Mack said. "Same thing. Ever'thing I done turned sour. She couldn't stand it any more. If I done a good thing it got poisoned up some way. If I give her a present they was something wrong with it. She only got hurt from me. She couldn't stand it no more. Same thing ever' place 'til I just got to clowning. I don't do nothin' but clown no more. Try to make the boys laugh."

Doc nodded again. The music was sounding in his head again, complaint and resignation all in one. "I know," he said.

"I was glad when you hit me," Mack went on. "I thought to myself: 'Maybe this will teach me. Maybe I'll remember this.' But, hell, I won't remember nothin'. I won't learn nothin'. Doc," Mack cried, "the way I seen it, we was all happy and havin' a good time. You was glad because we was givin' you a party. And we was glad. The way I seen it, it was a good party." He waved his hand at the wreckage on the floor. "Same thing when I was married. I'd think her out and then—but it never come off that way."⁶⁾

このように、作者はマックの生きざまと人間像を投影することによって、マック像をより鮮明に浮き彫りにしたのだと思う。要するに、「いいと思ってやることがみんなまずい方へと行き、自分の一生みたいなものだ」という述懐により、マックの人間像がさらにクローズアップされている。

また「あなたになぐられて、私は嬉しかったです」……「こいつはいい教訓だ。こいつは覚えていなければいけねえ、だけど私には何も覚えちゃいられねえです。私は懲りるといことがねえですよ、博士」という言葉の中に、ドックに対する自戒の念と反省が見られる。つまり『二十日鼠と人間』のレニーと全く同様の人間像を垣間見ることでもある。『二十日鼠と人間』においては、ジョージがレニーに対する指導的役割を果たし、うすのろのレニーを上手に守り立てているのに対し、この作品では、まさにレニー役をマックが演じ、ジョージ役をドックが演ずることにより、物語

がバランスよく構成されているといえよう。

“Doc,” said Mack. “I and the boys will clean up here—and we’ll pay for the stuff that’s broke. If it takes us five years we’ll pay for it.”

Doc shook his head slowly and wiped the beer foam from his moustache. “No,” he said, “I’ll clean it up. I know where everything goes.”

“We’ll pay for it, Doc.”

“No you won’t, Mack,” said Doc. “You’ll think about it and it’ll worry you for quite a long time, but you won’t pay for it. There’s maybe three hundred dollars in broken museum glass. Don’t say you’ll pay for it. That will just keep you uneasy. It might be two or three years before you forgot about it and felt entirely easy again. And you wouldn’t pay it, anyway.”

“I guess you’re right,” said Mack. “God damn it, I know you’re right. What can we do?”

“I’m over it,” said Doc. “Those socks in the mouth got it out of my system. Let’s forget it.”⁷⁾

ドックとマックの人間性が象徴されている場面であり、どんなにひどく殴られようとも自分の非には逆らえないマックがドックを慕う気持ちは、まさに思いやりと友情の絆で結ばれた『二十日鼠と人間』のジョージとレニーの人間関係そのものである。ドックとマックの場合にも、ジョージとレニーの人間像に見られたような愛情とほのぼのとした暖かさを読み取ることができよう。

ところで、マックが開いた最初のパーティーは、ドック不在のパーティーであり、ドックの実験所の器物を破壊するほどの無軌道ぶりであったがために、パーティーの悪評は罐詰横町全体に広まり、マックたちが酒と金を盗んだのだと町の人々から信じられた。マックとその仲間たちは社会的追放者と化し、すべての良き意図は罐詰横町の人々から忘れさられていたのである。

従って、マックたちは自分たちだけの世界に引きこもり、お互いに我慢し合って暮らす以外に方法はなかったのである。しかしながら、この時期にドックが、ある観察を試みてマックたちに対する見解を述べている。

Doc said: "Look at them. There are your true philosophers. I think," he went on, "that Mack and the boys know everything that has ever happened in the world and possibly everything that will happen. I think they survive in this particular world better than other people. In a time when people tear themselves to pieces with ambition and nervousness and covetousness, they are relaxed. All of our so-called successful men are sick men, with bad stomachs, and bad souls, but Mack and the boys are healthy and curiously clean. They can do what they want. They can satisfy their appetites without calling them something else."⁸⁷

（ドックが言った。「あの連中を見たまえ。あれが本当の哲人たちだ。思うに」彼はつづけた、「マックとその仲間たちはこの世界に起ったことは何でも知っているし、これから起ることも全部知っているのであろう。あの連中はこの限られた世の中では、他の誰よりも上手に生き残って行くんじゃないかと思う。外の者たちが、みんな野心と神経過敏と貧欲とで、我が身を引き裂いている時代に、あの連中はゆったりしている。我々のいわゆる成功者のすべてが病める人たちだ。胃も病んでいれば、魂も病んでいる。だがマックとその仲間たちは健康で奇妙なほどに汚れていない。彼等はしたいことをしているのだ。欲望を満たすに当って、それを他の名で呼んだりはいしないのだ」

スタインベックがこの作品で意図したものは、まさにドックの目を通して見たマックとその仲間たちの人間像である。つまり作者は自由奔放に生きる彼らの姿を高らかに賞揚し、名に支配されず、物に囚われず、もちろん社会規範に束縛されずに可能性を秘めた世界に住む人々に価値観を見いだそうとしたものと思われる。

やがて、時と共に罐詰横町にも喜ばしい兆しが見え始め、マックは最初のパーティーでの失敗と汚名を挽回しようと、ドーラの店を訪ねて、ドッ

クに対する自分たちの気持を表わすにはどうしたらいいか相談を持ちかけ、ドーラから次のような示唆を受ける。

“You gave him a party he didn’t get to. Why don’t you give him a party he does get to?” she said.⁹⁾

マックはドーラのよき助言により、仲間と相談して、ドックの誕生日に、だしぬけパーティーをやることに決めた。マックはドックを訪ね何気ない風に誕生日を聞くと、彼とは長い付き合いであるドックは、この間に不審感を抱いて、本当は12月18日なのに10月27日だと答えた。マックとその仲間たちは、ドックのために今度こそ10月27日のパーティーを成功させるべく自分たちの行動を自重することを申し合わせ、慎重にパーティー会場などの検討をする。

“This time,” said Mack, “we got to be sure he gets to the party. If he don’t get there, we don’t give it.”

“Where we going to give it this time?” Jones asked.

Mack tipped his chair back against the wall and hooked his feet around the front legs. “I’ve give that a lot of thought,” he said. “Of course we could give it here, but it would be pretty hard to surprise him here. And Doc likes his own place. He’s got his music there.” Mack scowled around the room. “I don’t know who broke his phonograph last time,” he said. “But if anybody so much as lays a finger on it next time I personally will kick the hell out of him.”¹⁰⁾

結局、マックたちは、ドックの実験所で再度パーティーを開くことにした。罐詰横町の人々は改めて、パーティーのニュースを聞いたわけでもなく、招待もされなかったが、今度こそパーティーに参加しようと意気込んでいた。

ところで、かねてからドックのお世話になったり、ドックと付き合いの

あった人々は、ドックに何をプレゼントするかで頭を悩ますのだった。ド
オラとその家の女たちは、ドックの実験所のベッドのみすぼらしさを知り、
彼女たちの手作りの絹のつぎはぎ蒲団を、リー・チョンは25フィートもあ
るかんしゃく玉の紐とシナの百合の根を入れた大きな袋を、マックとその
仲間たちは、ドックが猫を欲しがっていたので、空地にワナを仕掛けてつ
かまえた21匹の雄猫を準備するという具合で、みんなが思い思いにプレゼ
ントの品々を考えていた。

ドックは、ある酒場で見知らぬ酔払いが「ドックの誕生日にみんなが盛
大なパーティーをやろうとしているのだ」と言っているのをふと耳にし
た。彼はみんながパーティーを開いてくれることに対して、温かい気持が
湧き起るのだったが、前回やってもらったパーティーのことを思い出すと
内面的な震えを覚え、次の日から実験所をかたづけ、前回のように実験所
が破壊されるのを防ぐため、パーティーの準備を始めた。

やがて、パーティーの当日はマックたちを先頭にプレゼントを持ったお
客が実験所に到着し、前回とは違って、マックやその仲間たちは礼儀正しく
きちんと腰をかけて、上品にしていた。ドックは自らダンスミュージック
を蓄音器にかけると台所に入ってステーキを焼き、人々を歓待した。パー
ティーが進んだところで、ドックはドーラに「あのきれいな音楽をかけて
ちょうだい」と言われ、モンテヴェルディーの曲をかけると、客たちはひ
っそりと腰をおろし、彼らの眼は心の奥に向けられ、音楽が終わってもシ
ーンと静まり返っていた。ドックは一冊の本を取り出し、はっきりした深
みのある声で朗読を始めた。今はなき恋人の思い出を歌ったサンスクリ
ットからの英訳の詩『黒い金仙花』だった。

ドックが読み始めると、ドーラは目がしらをおさえ、この世の悲しみと
言ったものが、そこにいたすべての人々に伝わっていった。彼らは失われ
た愛を思い出し、呼びかけられた日々を思い出していたのである。そこへ
サンペドロ港の漁船の乗組員たちが、この辺に淫売屋があると聞いて、こ
のパーティー会場がその店だと思い込んで入ってきた。マックたちと大喧
嘩の末、彼らはマックたちに撃退された。騒ぎを聞いて駆けつけた巡査ま
で、パーティーの仲間に加わり、パーティーはたけなわになり、パーティ
ーの喧騒は罐詰横町の隅々まで聞こえた。サンペドロの船員たちも、今度
はおとなしくもぐり込んできてパーティーに参加し、心よく歓迎された。

ドックはテーブルの上に脚を組んで坐わり、微笑し、指で膝をたたいていた。

マックの善意に発した仕業も、しばしばドックに迷惑をかけることになったが、結局、ドックのために再度マックやドーラの企てたパーティーはとことんまで行き、すべての歯車がうまく噛み合わされ、罐詰横町の人々とも融合して、罐詰横町の人々の底意のない友愛の象徴となったのである。このパーティーについては、Warren French も *John Steinbeck* の中で次のような指摘をしている。

Chapters 20 and 21 are really a single long description of the failure of the first party, just as chapters 29 and 30 are of the success of the second ; therefore, it seems appropriate that these paired accounts should not be interrupted by interchapters. The catastrophic affair described in chapters 20 and 21 casts a pall over Cannery Row.¹¹⁾

つまり、スタインベックは第30章で、パーティーの本質について次のような哲学的な見解を述べている。

The nature of parties has been imperfectly studied. It is, however, generally understood that a party has a pathology, that it is a kind of an individual and that it is likely to be a very perverse individual. And it is also generally understood that a party hardly ever goes the way it is planned or intended.¹²⁾

これは、もちろん、スタインベックのパーティーに関する定義であると同時に、『罐詰横町』において、マックたちが開いたパーティーが意味するものは、(2)でも述べたように Benefactor を基調とした孤独で淋しい人間たちへの警鐘であろうと思う。

(4)

それでは、このパーティーがドックに対してどのような役割を果たしていたのであろうか。ドックは何故にパーティーが好きであり、彼にとって

パーティーが必要であったのだろうか。彼は実に人なつこい人間であり、自動車で犬のそばを通り帽子にちょっと手をかけるだけで犬たちも顔をあげて微笑するほど、温かい心の持ち主である反面、彼はまた孤独な人間でもあったからである。

In spite of his friendliness and his friends Doc was a lonely and a set-apart man...In a group, Doc seemed always alone.¹³⁾

彼の孤独は、一つには、彼の仕事から来るものであり、海洋生物の採集の仕事を休むわけにはいかなかったからである。さらに、彼の孤独は知的なせいでもあった。非常に知的な話になると彼と話の通じる罐詰横町の人々の数は限られてしまう。彼の孤独は彼に固有なものであり、実験所のあたりをブラブラしているフランキーが、その知能の低さの故に学校に行かせてもらえなくて孤独なのと対照的である。フランキーは、12才の時から学校へも行かず、毎日ウエスタン・バイオロジカルへ来るようになった。フランキーはドックのやさしさが好きで、実験所で働きたがった。

Doc asked : "Why do you come here?"

"You don't hit me or give me a nickel," said Frankie.

"Do they hit you at home?"

"There's uncles around all the time at home. Some of them hit me and tell me to get out and some of them give me a nickle and tell me to get out."

"Where's your father?"

"Dead," said Frankie vaguely.

"Where's your mother?"

"With the uncles."

Doc clipped Frankie's hair and got rid of the lice. At Lee Chong's he got him a new pair of overalls and a striped sweater and Frankie became his slave.

"I love you," he said one afternoon.

"Oh, I love you." He wanted to work in the laboratory. He swept out every day, but there was something a little wrong.¹⁴⁾

フランキーは一層孤独の中へと追いやられ、思春期になると施設に入れられるという孤独を味わう運命におかれている。スタインベックは、『二十日鼠と人間』の主人公ジョージとレニー像を、『罐詰横町』において二つのパターンに振り分けたと見ることもできよう。まず、主従の関係でとらえた場合には、ドックとマックの人間像がその範疇に属し、知能や孤独さの点からとらえた場合には、ドックと低脳児フランキーの人間像が浮かびあがってくる。つまり、『罐詰横町』においては、ジョージとレニー像が二重写しの人間性を帯びて敷衍されているように思う。スタインベックが低脳児フランキーを登場させたことは、『二十日鼠と人間』や『トーチヤー・フラット』のレニーやバイサーノたちのように、この物語の愛らしさや馬鹿さ加減を高めるのに大いに役立っている。

ところで、この作品で作者が取り上げようとした主題は二つあると思う。すなわち一つは、パーティーを通じての人間本来の本能である孤独さからの逃避による「集団性の追求」であり、もう一つは、「人間の孤独さ」についてであると思う。そして前者の線上には、ドックを中心とする人々、マックとその仲間たち、メアリー・トールボット、ドーラとその女たち、画家のヘンリー及びマロイ夫妻などが並び、後者の線上には、ドック及び低脳児フランキーを並べることができよう。さらにその孤独を裏づけるのが、ホレイス・アベヴィルやウィリアムやジョーイの父などの死や、静かに溺れ死んでいた女性の死体である。

結局、この作品においても、スタインベックは『月は沈みぬ』のオーデン市長に見られるように個人の意志の尊さを謳い、人間の価値がどこにあるのかを refrain のように繰り返しているように思える。

(5)

スタインベックは、モンテレイの罐詰横町という場所を背景に、そこで暮らす人々の生活にスポットを当て、罐詰横町という地域によって醸し出された人々の心象やそこに内在する人間性を、この作品を通して抉り出そうとしたものと思われる。すなわち、現実を見る作者の感情や直観が抉り出し、浮き彫りにしたものは、ドックの孤独さであり、Benefactor を絆とするマックとその仲間たちや、ドーラとその女たちや、フランキーへの愛情と同情心、つまり、しいたげられた人々に対する暖かい人間愛や困難を切り

開くたくましい生命力と見ることもできよう。

いずれにせよ、スタインベックは、一方では軌道をはずれることのない真面目な生き方をする人々の人間像を描き、他方では、無軌道かつ無欲な人々の人間像を描くことにより、読者にその判断をゆだねているようである。要するに、マックたちの生き方の中に純粋な生きる喜びがあるとしても、無法者の生活は『トーティヤ・フラット』でもそうであるように、不満と失敗に満ちたものであり、その喜びは強烈であっても永続きはしないという教訓を、作者は語りかけているようである。

NOTES

- 1) Steinbeck の説明によれば、パイサーノとは、スペイン人、イタリア人、メキシコ人、コーカサス人の混血種族である。
- 2) John Steinbeck. *Cannery Row*: William Heineman Ltd, 1977, p. 7
- 3) Ibid., p.p. 7-8
- 4) Ibid., p. 9
- 5) Ibid., p. 28
- 6) Ibid., p.p. 90-91
- 7) Ibid., p. 91
- 8) Ibid., p. 97
- 9) Ibid., p. 104
- 10) Ibid p.p. 114-115
- 11) Warren French. *John Steinbeck*: Twayne Publishers, A Division of G. K. Hall & Co., 1975, p. 120
- 12) John Steinbeck. *Cannery Row*: William Heineman Ltd, 1977, p. 126
- 13) Ibid., p. 68
- 14) Ibid., p.p. 38-39

REFERENCES

- 1) Peter Lisca. *The Wide World of John Steinbeck*: Rutgers University Press, 1958
- 2) Warren French. *John Steinbeck*: Twayne Publishers, A Division of G. K. Hall & Co., 1975
- 3) Robert Murray Davis. *Steinbeck*: Prentice-Hall, Inc., 1972

- 4) Howard Levant. *The Novels of John Steinbeck, A Critical Study* : University of Missouri Press, 1974
- 5) Richard Astro and Tetsumaro Hayashi, eds. *Steinbeck, The Man and His Work* : Oregon State University Press, 1971
- 6) Stanley Cooperman. *The Major Works of John Steinbeck.* : Monarch Press, 1964
- 7) John Steinbeck. *Cannery Row* : William Heineman Ltd., 1977
- 8) テツマロ・ハヤシ編 坪井清彦監訳『スタインベック作品論』(英宝社, 1978)
- 9) 稲沢秀夫『スタインベックの世界』(思潮社, 1978)
- 10) 石一郎『スタインベック』(研究社, 1967)

津田梅子の女子教育について

石 川 教 張

一 女子教育の先駆者

津田梅子（一八六四～一九二九）は、女子英学塾を創立し、女子にたいする専門的で個性的な英語高等教育の実践に献身した先駆者として知られている。

梅子による女子英語教育の方針は、英語を専修することによって女子の知識と教養を高め、さらに英語教師の資格をもって社会で働いてゆく婦人を養成するところにあった。

同時に、梅子は女子の人格形成と社会的地位の向上を教育の目的にかかけ、近代日本における女子教育の道をきりひらいた。それは、社会的に差別され教育の機会を充分与えられず、能力を持ちながら無力・無自覚に忍従している女性の社会的現実を改善するという時代的課題の解決にとりくむことを意味していた。梅子は、こうした女性の社会的現実を打破するために、女性自ら意志と知性および品性を自発的に養い、真に男子の協力者として自立して生きる女性のありようとその精神の独立を身につけるための女子教育に全力を傾注したのである。

このことは、彼女が三十五歳（数え年・以下同じ）の時に、米国コロラド州デンヴァーで開かれた「万国婦人連合大会」で「婦人は、全世界を通じて、奴隸や人形のような無自覚の状態からたち上り、真に男子の協力者となり、対等の地位を獲得することが出来るであろう」と述べていることによっても明らかである。また、女子英学塾の開校式において、「円満な婦人即ち Allround Women となるように心掛けねばなりません」と語った言葉にも示されている。

梅子は、こうした教育の理想と目的をかがげ、困難ではあったが創造的な女子英学塾の教育と経営にとりくんだがそこに女子への英語教育にもとづく専門研究と教養の向上及び人間をつくるための総合的な女子教育の充実とが一体となって実行されていた点を注目しないわけにはいかない。「西洋の詞を覚えるなら其思想も同時に学ばなくては行けない」「よく読んで覚える。充分にその Spirit 迄解ると云ふ風にしないではいけない」という梅子の言葉は、英語の研究談として述べられたものであるが、知識にとどまらないで広く思想や精神の世界にまで及んで理解することになれば、学問を実際の用に立てることはできず、人格向上のための真の教育を体得することにはならないという教育実践のありようをものがたっている。

このような梅子の女子英語教育と人格形成をめざす女子教育は、近代日本の教育史だけでなく女性史上においても不朽の足跡をしるしている。そこで、以下に梅子の足跡のいくつかをとりだして、いささか書きしるしておきたい。以下に述べる内容は、いずれも吉川利一著『津田梅子伝』と津田塾大学編『津田梅子文書』を参照し抜き書きしたものであり、津田梅子の業績のなかから学んだものの一端を書き綴った研究ノートにすぎない。しかし、いまなぜ津田梅子なのか？という問いを問いつづけながら、教育者であり婦人問題の理解者であった津田梅子を日本女性史上に位

置つけ、その歴史的意義を明らかにしたいという問題意識にもとづくものである。

二 米国留学と女子教育への決意

明治四年（一八七二）十一月十二日、岩倉具視を特命全權大使とする欧米視察団は、祝砲のどろくなか、横浜港を出航して太平洋横断の旅にたった。一行は、岩倉大使のほか副使の木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、山口尚芳はじめ視察団随員四十九人、留学生五十八人、計一〇七人であった。男ばかりのなかに、銀杏がえしや稚児まげをゆい振袖を着た五人の女子留学生在いた。

開拓使留学生といわれたその五人の少女とは、吉益亮子（十五歳）、上田梯子（十五歳）、山川捨松（十二歳）、永井繁子（九歳）、それに最年少の津田梅子（八歳）であった。

近代日本における女子教育のあけぼのは、明治三年（一八七〇）九月にアメリカの婦人宣教師ミス・メリー・E・キダーが横浜のヘボン塾で三人の女子を教え（のちのフェリス女学院）、また築地A6番女学校、横浜ミッションホーム（現在の共立女子学園）や但馬（兵庫県）出石藩女学校の創立などによってもたらされた⁽⁶⁾。その主要なものはプロテスタント宣教の一環としてアメリカ人の手で推進されていた。この意味で、明治新政府による国家的政策にもとづくものであったが、日本人による最初の国際的視野にたった女子教育は、この明治四年の五人の女子留学生派遣をひとつの画期としていたといっても過言ではない。

明治新政府は、文明開化と英語熱の高まりを背景に欧米列強の仲間入りを教育に求めたが、とくに女子教育に重大な関心をはらっていた。明治四年九月には、「華族に賜った外遊奨励の詔勅」を発し、海外に赴く者は妻や姉妹を同

行して欧米の女子教育にふれさせよと奨励している。これは、無知な女性であつては優秀な子供を育てる母とはなれないという理由によるもので、その目的は「育児ノ法」を知らしめる点にあった。ついで政府は、同年十二月に東京神田一ツ橋に女学校を設立し、翌年十一月に東京女学校を開校、明治五年八月二日の学制並びに太政官学問奨励の布告⁽⁵⁾などによつて「良妻賢母」の枠組みにもとづく女子教育の実施にとりくむに至るのである。五人の女子留学生が、こうした政府の教育方針の施行に先立つて開拓使留学生として渡米していたことは注意しておくべき点であらう。

この開拓使留学生の派遣は、北海道開拓次官黒田清隆の建言によるものであった。黒田は、欧米視察の折ワシントで駐米少弁務使（公使）の森有礼と女子教育の必要性を論じあつた。黒田は、アメリカにおける婦人の教養と社会的地位の高さに驚き、森からも国家百年の計は女子教育にまたねばならないので帰国したら女子教育の具体化をはかつてほしい旨を依頼されたこともあり、帰国後ただちに教育の促進に関する意見書を政府に提出し、「女こう」を設立し人材を教育することの必要性を説き、「故に今、幼稚の女子を選み、欧米の間に留学せしめんことを欲す。その学資の如きは当使之を措弁せん」と建言している。⁽⁶⁾このプランは、岩倉具視の賛同をえて早速実施にうつされたが、攘夷の風潮がなお充満していた頃でもあつたから、漸く応募してきたのが五人の少女たちであつた。彼女たちの父兄がいずれも外国事情に多少なりとも理解をもっていたからである。たとえば、上田悌子はこれ以前に新潟英学校教師ブラウンとその協力者であつた前掲のギターより英語を学んでいる。⁽⁷⁾津田梅子における直接の決定的動機は、父仙（前名仙弥）の欧米に対する理解と見識によるものであつた。

津田梅子は、元治元年（一八六四）十二月三日、仙と初子の二女として江戸牛込南町に生まれた。父仙は、下総佐倉藩主堀田正睦の家臣の家に生まれたが、ベリー及びハリスが開国を要求して来航してきた時代に応じ風雲の志を抱

いて江戸に赴き、蘭学について英語を学んだ。やがて幕府の徒士津田家の養子となり外国奉行の通弁（通訳）となり慶応三年（一八六七）に勘定吟味役小野友五郎の随員となり、福沢諭吉らと共にワシントンに渡った。明治維新を迎えると、いちじ東京向島の家より築地のホテル館に勤め、ホテル館で入手に苦勞していた外国人向けの西洋野菜の栽培に取組んだ。明治四年（一八七一）仙はホテル館をやめて北海道開拓使の嘱託となり、かたわら東京麻布に農園を造りアスパラガス、リンゴ、オランダイチゴなどの栽培事業に実績をおさめた。この頃に梅子の留学話が起ったのである。こうして仙は、外国への強い関心と北海道開拓使嘱託という立場から娘梅子を開拓使留学生として渡米させたのである。このように、梅子の一生を決定づけたものは、女子教育をはかる国家的・時代的な気運と父仙の欧米に対する理解及び娘をその教育にふれさせようとした見識にあった。

このことについて梅子は、後年に「不思議な運命で私は幼い頃米国へ参りまして、米国の教育を受けました」と回想している。それは、八歳の梅子の思いを超えたところで働いた運命の不思議さであったばかりではなく、人間の運命を決定づけていく歴史の不思議さともいふべきものであろう。

梅子は、父仙からはなむけにもらった『英語入門書』“English Primer”と『英和小辞典』A pocket Edition of Japanese Equivalents for the Most Common English Words”や絵草紙、人形などのおさめられた行李をたずね、横浜を出てから七十日を経てワシントンにたどり着いた。やがて梅子は、吉益亮子と共にジョージタウンの日本弁務使館書記官のチャールス・ランメン夫妻の家にひきとられた。梅子は、ランメン夫妻の親身の世話を受け、これ以後十年余の留学生活をここで送ることになる。五人のうち、吉益亮子と上田悌子の二人はまもなく健康を害して明治五年十月末に帰国し、永井繁子は明治十四年（一八八一）に梅子より一足早く日本に帰っている。

チャールス・ランメンは、文学に親しみ自然を愛し、ロングフェロー、ディケンズ、グレイリーなどと交遊を結んでいた。『米國議會辞典』『米國文官年記』や『ウェヴスター伝』など著書は三〇余種にのぼり、日本公使館に關係してからは日本の書物、器具類を収集したほか『米國在留の日本人』を書き、日本及び日本人に深い理解をもっていた。夫人のアデリンは、親切で愛嬌のある妻であった。二人の間に子供がなかったこともあり、夫妻は梅子を「日光」(Sun-beam)と呼びわが子のように愛しはぐくんだ。夫人は梅子と心を鬼にして別れた母初子のつらさを思いやりながら、梅子の様子を母初子に伝える手紙を書きおくった。その手紙のなかには、次のような一節が綴られている。

「殊に梅は覚え宜敷、同人へ逢い候う人々、何れもその立居振舞をこのみほめ申し候。これまでのお育て方宜敷こと、おうわさ申し上げ候。私共一同梅を祝していう、敵母のその愛女と遠く隔絶するのを樂しむは、その子天よりくる処の才知あるが故なりと。又君を祝していう、外国人に託するに適う、かくのごとき愛情深く少女を得るは天の賜なりと。私共一同既に梅と懇親を結びし故に、若し後來、時ありて別るる節は如何のなげきあらんかと、唯今より心配罷り在り候」⁽⁹⁾。

梅子は、現実的な意欲と剛健な精神を示すヤンキーズムの社会風潮と誠実で清廉なビュリタニズムの理想精神のただようランメン夫妻の生活に大きな感化をうけながら勉学に励んでいた。理知的で鋭い気性は梅子の生来のものであったろうが、清廉で謙虚さを失わず不正や虚偽をきらい、思いやりと親切に富み温情豊かな人間愛をつらぬいた梅子の人柄は、こうした生活環境のなから学びとったものであらう。

これ以後、梅子は私立小学校スティブンソン・セミナリに入学した。アデリン夫人は、母初子宛に「梅の学問の進み早きにはいづれの人も感心いたし候」⁽¹⁰⁾と書き送っている。まもなく梅子は最初の作文 From Japan to America

を書いた。梅子が最初にランメン家にきた時、彼女の知っていた英語はありがとうだけであった。それから、たった九カ月英語を学んだだけの八歳の少女の作文を見たアデリン夫人は「非常によい出来であると思う」⁽¹¹⁾と感歎した。夫妻は、梅子にことさら信仰をすすめなかったが、日曜学校に通っていた梅子が自主的に洗礼をうけたいと申しでたので、梅子の心に偏見や排他的な考えをうえつけないため一つの教派に所属させないように配慮しつつ、独立教会のオールド・スウィズ教会で洗礼をうけさせた。梅子は九歳の時にも「日本の家と太平洋航海」「A Japanese Home and a Voyage across the Pacific Ocean」を書いて⁽¹²⁾いる。ここには、日本の家も米国の家もすぎだが母のいる日本の家の方がもっと好きであること、移転前の日本の家は人家が少なく近くに池があり蓮がさき向うに田んぼがあったこと、太平洋航海の模様、ランメン夫妻はとても親切であること、友だちの多いこと、学校が非常に楽しいことなどがしるされている。梅子は、すでに日本語をすっかり忘れ、英文で「数年上の米国の少女よりも優れている」作文を書くにいたっていた。また小学校卒業式後の学芸会でも、ブライマントの白脚の牝鹿「The White-Footed Deer」と題する詩を英語で朗読した。

梅子は十四歳になった一八七八年の秋にアーチャー・インスティテュート女学校に入学し、語学や普通学科のほか心理学、天文学、英文学、数学、音楽などを学んだ。一年生の時に「日本の生活」「Life in Japan」と題した作文を書いた。⁽¹³⁾一八八二年の卒業証明書には「ミス・ツダの進度は、ラテン語、数学、物理学、天文学及びフランス語では、クラスの水準よりずっと進んでいる。学んだ学科のどれについても、はっきりした理解をもっている」と記されている。⁽¹⁴⁾

明治十四年（一八八一）春、開拓使から帰国するよう伝えてきた。秋には健康を害していた永井繁子が一足早く帰国したが梅子と山川捨松は一年延期の許可をうけた。梅子が、ランメン夫妻と別れ、山川捨松と共に帰国したのは、

明治十五年（一八八二）十一月中旬のことであった。

帰国した梅子にとって痛感されたことは、女性が社会に出て働く場のないことであり、男女の差別が強く女性にも独立の精神が欠けていることであった。のち、梅子は次のように回想している、

「最初の米国留学から帰ったとき、わたしが特に心をうたれたのは、男女間に非常な差別のあること、男子が絶対権をもっていることであつた。女性は今全く隷屬的で自活の道もなく、教えることのほかに仕事もなく、教師の訓練をうけるものも、教えることのできるものも、殆どなかった。女性には自分名義の財産をもつことができなかった。女性には父とか、夫とか、男の親戚のひとつにみられていた。このために、女性には独立の精神がまったく欠けていた」¹⁵

こののち、梅子は欧米使節団に同行した縁から伊藤博文の妻の通訳と娘の英語教師として太政官御用邸に住み、やがて下田歌子の経営する桃天家塾で英語を教えるかたわら、下田歌子より国語、習字を学んだ。ついで伊藤博文の推挙をえて、明治十八年（一八八五）に創立まもない華族女学校（学習院女子部の前身）教授として英語を担当した。梅子は、実用の英語を中心に会話、書取、作文に力を注いだが、学問を身だしみの一つ程度にししか考えない上流家庭の意欲に乏しい子女の状態に違和感と失望を抱いてゆくのである。

明治二十一年（一八八八）、梅子は華族女学校が外人教師を雇う件について相談をうけた折、友人のアリス・ペーコンを推せんした。二十五歳になっていた梅子は、女に教育は禁物といった風潮をたださねばならない、そのためには自分自身の才能を十分のばしたい、わたしのなすべき仕事は何であるか、何か専門の研究をしたい、と考え、魂をうちこむ仕事をみつきたいと煩悶し、このことをペーコンに相談した。やがて、梅子は結婚話にもならず、ペーコンのすすめもあって再度の米国留学に赴き、明治二十二年（一八八九）九月にプリンマー・カレッジに入学、生物学

を専攻した。また、化学、歴史学、哲学、経済学、英文学を学び、モルガン教授との共同研究により「蛙の卵の発生について」と題する研究論文を書いた。さらに帰米していたアリス・ペーコンの求めに応じて「日本の女性」についての分析も行っている。梅子は、この三年に及ぶ留学生活において、日本女性の向上のためには女子教育が必要であり、とりわけ女子の高等教育がきわめて大切であると考え、これまで未開拓の女子高等教育に一生をつくすという目標をさだめたのである。やがて梅子は、後輩の女性に教育の機会を与えるため「日本婦人米国奨学金」と名づける基金活動にとりくんだ。後年、この基金によって留学した人々は、星野あい（津田塾大学長）、藤田たき（同教授）など十四人に及んでいる。

明治二十五年（一八九二）に帰国した梅子は、二十八歳から三十五歳までの八年間、華族女学校と女子高等師範学校で英語を教授した。日清戦争がおこると、『米国インディペンデント』誌に「日本婦人と戦争」と題する一文を載せ、婦人の国家に対する忠誠と純一な愛国的行為を説明し、軍人に勇気を与えた家庭の妻や母の力とその戦争への覚悟を知らせようとした。また、『ウーマンス・ディパートメント』誌にキリスト教と愛国心に関する一文を寄せ、愛国心をいっそう高め潔めるキリスト教が日本婦人に理解されたら、日本婦人にまさる真剣と犠牲と忍耐と服従の精神は世界のどこの国にも見られず、ひとたびこの道が開けたら将来の日本のキリスト教はすばらしくなる、とのべている。これは、排他的な国家主義の教育ではなく、とくに日本婦人の精神の向上をはかるため高潔な愛国心を忍耐強く教育していくことの必要性を論じたものであったといえよう。

さらに梅子は、胎動する婦人運動にに応じて日本婦人の状況にいっそう深い関心をほらい、『フアー・イースト』誌掲載の手紙のなかで、こうのべている。¹⁰⁸日本ではまだ教育を受けた婦人は少なく、高等女学校以上の学校も少ない。婦

人は自分の財産を持たず、婦人が大きな事業を企てるのは困難で、はじめは小規模のものからしなければならぬ。さし迫った仕事は、婦人の救済事業である。若い娘が大ぜい田舎から出て身売られているからである。婦人に対して何らかの実業教育の計画を立て、婦人が自ら生活ができ独立しえるように、また社会的勢力をもちえるように教育することが望ましい。婦人は進歩して、社会や家庭において、もっと高い地位を占めえる時期がこなければならぬ——日本婦人の進歩と向上をめざす小規模な女子教育の創業、という梅子の教育計画がここに明らかにされている。

この前後に『シカゴ・レコード』誌に寄せた新旧日本の婦人生活の紹介にも「新しい日本婦人、日本の子供生活、娘たちの学校教育、日本の上流婦人、東洋のフランス人、日本の主婦、生産者としての婦人」という題目をあげており、婦人問題についての梅子の深い関心と積極的な姿勢を示している。明治三十一年（一八九八）五月に米国コロラド州デンヴァーで開かれた「万国婦人連合大会」で、日本婦人代表として参加した三十五歳の梅子が、婦人の教育と向上をうったえ、男子の協力者となり対等の地位を獲得することを演説したのは、この時のことである。²⁰

梅子は、アメリカからの帰路、イギリスに招かれ、ヨーク僧正と会って励ましをうけた。その折の思いをこう告白している。「わたしの信仰はよわく、はつきりしない。けれど同胞に対する愛の美しいことは、十分深く信じている。わたしはこの愛を得たいと思う。その愛を得て同胞のために、そしてそれを通して神のために働きたい。わたしはある人々の抱くような、はつきりした信仰を持っていない。わたしの信仰はおぼろである。わたしの心は理性の証明を求めている。しかしそれは不可能であろう。かといって教えられるままに教義を受けいれることは、わたしには出来そうもない。とはいえ聖潔な生活 Pure and holy life 人類に対する愛と同情、広義の愛 Christian love のいかに美しく尊いことよ。わたしはそれを信じている」²¹。

ここには、崇高な人類愛と「聖潔な生活」のもとに生き、その自由な愛の精神を体して女子教育に献身していこうとする梅子の決意と祈願のころざしが流露している。彼女が一生独身で清廉な生活をいとなみ、女子教育に情熱を燃やした背後の力は、「おぼろ」ではあつたが尊び信じつづけた愛の信仰であつた。

梅子は、ロンドン滞在中にオックスフォード大学の聴講生となり、シェークスピア、歴史、倫理、エリザベス朝散文作家についての講義を聞き、当時八十歳であつたナイチンゲールとも対面している。

女子の高等教育の発展をめざして——梅子は、この決意を抱いて、明治三十二年（一八九九）に帰国した。日本では、その前年に高等女学校令が公布され、各地に高等女学校が設立されつつあつた。他方では、大阪の梅花女学校長成瀬仁蔵が伊藤博文夫人ら上流婦人を発起人として女子大学設立の計画をすすめていた。明治三十四年（一九〇一）に東京目白に創立された日本女子大学校がこれである。

梅子は、かねてからの理想を実現しようとし、自分の力の範囲で可能な女子英語教育のための私塾を構想していた。明治三十三年（一九〇〇）四月、かつての約束通りアリス・ベークンが来日し、七月には梅子は華族女学校と東京女子師範学校教授を辞任した。当時の梅子は従六位、高等官五等、年俸八百円という社会的地位と名声を得ていた。これを捨て、女の身として独力で学校の設立と経営にとりくもうとすることに人々は驚き、その無謀を心配する人々も多かった。梅子は、成瀬のように上流婦人の支援を求めなかった。父仙や姉琴子の夫で実業家の上野栄三郎、それに新渡戸稲造、元田作之進の協力をえ、大山捨松（山川捨松・大山巖夫人）を顧問とした。教師はベークンのほか鈴木歌子、桜井彦一郎に依頼した。学校の名称は「女子英学塾」と決まった。その規則の主旨第一条には「本塾は婦人の英学を専修せんとする者、並びに英語教員を志望する者に対し、必要の学科を教授するを目的とする。但

し教員志望者には文部省検定に應ずべき学力を修得せしむ」としてゐる。およそ十七、八歳以上の女子に教育をほどこすこととし、明治三十三年（一九〇〇）七月、「女子英学塾」の設立が認可された。校舎は、東京麹町一番町の借家であつた。畳敷きの六畳二間を教室にあてたが、その一室は食堂、もう一室はベーコンの居間との兼用であり、十畳の客間が講堂、奥の十畳が寄宿生の部屋、二階八畳が梅子の部屋であつた。

こうして「女子英学塾」（通称「津田塾」「Tsuda College」のちの津田塾大学）は発足したのであつた。²²

三 女子英学塾と女子高等教育の理想

明治三十三年（一九〇〇）九月十四日、「女子英学塾」は開校式をあげた。式場にはピアノと英書の本棚がおかれていた。生徒は十人であつた。参列者は、生徒十人のほかは来賓の大山捨松と教師をふくめて十七人であつた。女子英語高等教育の先駆であるこの光景は、小規模な私塾による個性的な全人的教育をめざす梅子の理想を象徴していた。梅子は、開校式において英文の原稿を手にしながら日本語で次のような式辞をのべている。やや長文になるが、梅子の抱負を聞いてみよう。

「今日から授業を始めることになりました。私がこの塾を開いた理由と塾の目的について、少しく申しあげたいと思います。

私が十数年教育事業に関係いたしております間に、強く感じたことが二つ三つあります。第一は本当の教育は立派な校舎や設備がなくても出来るものである、ということであり、私はよい教室や書物やその他の設備を軽んずる、というのではありません。出来ることなら、これらも完全にしなければなりません、真の教育に

は物質上の設備以上に、もっと大切なものがあると思います。それは一口に申せば、教師の資格と熱心と、それに学生の研究心であります。詳しいことにつきましては、いづれおりを見て申しあげることになりました、とにかくこういう精神的の準備さえ出来ておりますならば、物質的の設備がかけていようとも、真の教育は出来るものである、とそう私は考えています。

次に感じましたことは、大規模の学校で多数の学生を教える場合には、十分その成績を上げることが出来ない、ということでもあります。殊に大きい教室で、多数の学生を教えていては、知識の分配は出来ましようけれど、真の教育は出来ません。真の教育は生徒の個性に従って、別々の取扱いをしなければなりません。人々の心や気質は、その顔の違うように違っています。従ってその教授や訓練は、一人一人の特質にし、つくりあてはまるように仕向けなくてはなりません。多人数では無理が出来ます。ですから私は真の教育をするには、結局小人数に限ると思います。私はこれ迄数名の生徒を自宅において、格別の設備がなくとも、どの程度までこれらの生徒を教育することが出来るかを、試して見ようと考えていました。

不思議な運命で、私は幼いころ米国へ参りまして、米国の教育を受けました。帰朝したらば——これという才能もありませんが——日本の女子教育に尽したい、自分の学んだものを日本の婦人にも分ちたいと、こういう考えで帰りました。けれども私が帰りましたころの日本は、今日とは大分様子も違っていて、第一働く学校もなく、いままですんだ知識を、実際に応用する機会ありませんでした。ところが今日では女子教育も非常に進み、ご承知の通り高等女学校は年々ふえて参ります。また文部省では最近教員検定試験の制度を設けました。結構な制度であります、女子の高等教育が振はぬため、この試験を受けられるような女子は、今のところ殆ど一人も御座いません。英学塾の目

的は色々ありますが、主な目的の一つは、将来英語教師の免許状を得たいと望む人々ために、確な指導を与えたいということにあります。形こそ見る影もない小さなものでありますが、婦人に高尚な働きを与えるこういう学校は、これからの婦人に無くてはならぬものと考えまして、この塾を創立することにいたしました。この目的を仕遂げるために、ふつつかながら、私は全力を注いで自分のベストを尽したい存じます」。

「最後に二、三のご注意を申します。専門の学問を学びますと、とかく考えが狭くなるような傾きがあります。一つの事に熱中すると、ほかのことを忘れがちになるものです。英語を専門に研究して、英語の専門家になろうと骨折るにつけても、何事にも役立つ婦人となるに必要な、ほかの事柄をそりやくにしてはなりません。円満な婦人即ち allround women となるように心掛けねばなりません。こういう考えから月に一、二回は英語の外に、色々の問題について専門家のお話を伺いたいと思います。早速今週の金曜から、ミス・ペーコンに時事問題を受持つて頂くことにいたしました。音楽や絵画なども、希望の方にはお教えしたいと思っています。

この塾は女子に専門教育を与える最初の学校であります。従って世間の目にもつき易く、いろいろの点で批評を受けることでございましょう。一体世間の批評などというものは、さほど重要なものではありませんが、もしかような批評が幾分でも、女子高等教育の進歩を妨げることにありますならば、誠に遺憾なことでございます。しかもその批評の多くは、学校で教える課程や、教授の方法についてかれこれ申すものではありません。ほんのささいなことを、例えば日常の言葉遣いとか、他人との交際振りととか、礼儀作法とか服装とか、かようなこまかいことを批評して、全体の価値をきめようとします。それ故、こういう点にも十分注意して、下らない世間の批評に上らないように、気を

つけていただきたいと思います。

それから何事によらず、あまり目立たないように、出すぎないように、いつもしとやかで謙そん（遜）で、いんぎん（慇懃）であって頂きたい。こういう態度は、決して研究の高い目的と衝突するものではありません。婦人らしい婦人であって、十分知識も得られましょうし、男子の学び得る程度の実力を養うことも出来ましょう。そこまで皆様をお導きしたいというのが、私どもの心からの願いであります——。

ここには、梅子の女子教育に関する理想・抱負・目的・方針のすべてが語られている。

このなかで梅子は、次の点を明らかにしている。第一に、教師の教育姿勢と学生の研究態度についてである。梅子のはのべている。真の教育には物質的の設備以上に大切なものは、教師の資格と熱心と、それに学生の研究心である。物質的な設備よりも「精神的の準備」を重視したのである。これは、広義の愛の精神にもとづく女子教育によって女性の向上と独立精神をうちたててゆく理想をあらわすものであり、「専門の研究」をこころざして以来抱き続けてきた教師自体の専門研究と教育への情熱的、献身的なとりくみの重要性を指摘したものである。同時に、強い意欲をもたず学問を身だしみのひとつとしか考えない当時の風潮に対して、学生の積極的な研究活動へのとりくみを求め、この両者が一体となることによって真の教育が実現する点を主張したものであった。

梅子の教育姿勢は、「一口に評せば熱心、厳格の二語に尽きた。梅子は文法、講読、作文、書取、英詩、教授法などの学科を受持っていたが、巧な教え方と全心を打込んだ意気ごみとは、生徒の心をひきつけずにはおかなかった」といわれる。本科卒業者に対し英語科教員無試験検定資格が女学校で最初の恩典として許可され、大正十二年（一九二三）日本女子大学専門科英文学部がその許可を得るまで二十年間にわたり女子英学塾のみに許可されていたのも、

また塾の英語は正確であるという高い評価を得たのも、梅子に示される「教員の資格と熱心」な教育指導とそれを裏付ける専門研究への多年の経験及び研鑽によるものであった。また、その熱心・厳格な教授ぶりも、学生に十分内容を会得させ、学生自らが誤りを正し真剣に研究に傾注するよう能動的にしむけ、これによって、自主的に研究心を燃えあがらせるようにしたためでもあった。梅子は、学問に対する情熱と決断力と良い品性を向上せしめようとする理想を持たぬものは、塾の生徒たるべき資格がないと断言し、こうものべている。〈教師や他人に頼る教育を一掃し、借り物の意見をあてがうのではなく、作文の時間で正確な物の見方、考え方を悟らせること、訳解の時間ではテキストの事件を批評し検討することも一つの方法である。外国の思想を与えるのは必要であるが、口先きだけではなく実行が大切である。学生に自ら合理的な意見を立て得るよう働きかけ、学問への情熱と決断力と良い品性を高めるようにすることが大切である。梅子はまた、外国語に精通しその国の文学を深く研究せしめ、言葉を感じると同時にその思想を理解し、学生にとって反省と向上の助けとなるよう倫理思想と教訓を与える点を重んじている。²⁵

このことは、外国語について教えるのではなく、外国語を教え外国の思想精神そのものを教える方針を提示した至言であろう。この教育姿勢は、同じ頃に内村鑑三が「外国語研究の方法」²⁶と題する一文を発表して次のように指摘していることと一脈通じよう。「吾人は之を語学と称するも言語は素是れ習慣にして學術にあらず、故に完全に之を学ぶの法は是に慣るるにありて、之を文法的に究むるに非ず、外国語研究の法は常に実習の一事に止まる」。

この内村の見解は、外国語研究（とくにこんにちの）に重要な点を示唆しているものといえよう。しかし梅子もまた外国語の実習や「口先きだけでなく実行」する教育を重視した。内村が「実習」に限定したのに対し、梅子は文法をふくむ実習による外国語修得を中核としながら外国語に結晶されている欧米の思想文化や精神をとらえ、学術研究

と欧米親善と学生自らの主体的認識を深める教育にまで高めようとしたのである。正確な英語・英文学の修得・理解が、正しい理解と自覚をうむとする梅子の教育論は、経験的な「習慣」を主とする内村の外国語研究の方法論をのりこえたものであったといえるのではなからうか。梅子の外国語教育における今日的意義を、ここにも再発見することができよう。

第二に、真の教育は生徒の個性にしたがわねばならず、そのためには小人数に限ることを明らかにしている。小規模による個性豊かな女子教育は、梅子の理想であった。大規模な学校で多数の学生を教えたり、大きい教室で多数の学生を教えては真の教育はできない、という指摘は、たんに知識を得るだけでなく、学問に対する情熱と決断力を養い品性を高めていくという魂をうちこむ教育理想からうち出されたものであった。この言葉は、こんにちのマスプロ教育だけでなく教育の現実への本質的な批判として聞くべきものがある。この個性教育は、個性に応じ個人の必要に応じてなされ、一クラスは二、三十人を限度とするのがよいとしている。

女子英学塾の規則には、「家庭の薰陶」と「日夕の温育感化」につとめることをあげているが、これも学生との不⁴⁰断のふれあいによって個性を発見し、その個性に応じて日常的に感化を及ぼそうとする姿勢をあらわすものであった。梅子の直面していた女子教育の課題は、能力がありながら教育の機会が与えられず、男女差別の束縛をしいられている女性に、教育を通して自覚を高め、社会的にも家庭においても自主的で独立心をもって生活できる婦人としてゆくことであった。それは、国家の要請による「賢母」型教育ではなく、また不道徳で無責任になりがちな傾向をもつ小市民的な「新しい女」の動きともことなった誠実で自発的な婦人の育成とその自主独立の精神生活の確立をめざしたからでもある。こうした家庭の薰陶と日夕の温育感化を実践するために梅子は、女子英学塾に寄宿舎を設け、全

寮制による自由な個性教育を行なったのである。

梅子は、英学塾における寄宿舎について次のように語っている。「英学塾の寄宿舎には唯今二十名足らずの生徒が居ます。これは家族的の組織でありまして其の主義は全く放任主義。併し放任主義と申しましても決して氣儘放題にして置くというではありません。其の放任主義の裡には自営独立の精神が籠って居ります」「この家塾で放任主義を行なうのは畢竟独立心を養ふ為であつて、この狭い小さな家塾で其の習慣をつけて置くのは他日大なる社会、広き世界へ出て事の欠けない做度しどであります。取も直さず学問を実際の用に立てるの準備であります」。——学生の自営心と独立心を養うという教育の目的が、こうした寄宿舎に対する方針にも貫かれていたことを知ることができよう。

第三に、女子英学塾の目的が将来英語教師の免許状を得たいと望む人々のために必要な指導を与えること、英語の専門家にならうと努力するためには何事にも役立つ婦人となるために必要な事柄を学ぶことが大切であること、円満な婦人 *allround women* になるようこころがけること、を明らかにしたことである。

これは、女子に専門の高等教育を与える最初の学校としての使命を宣言した言葉である。社会で働く女性の人間教育という梅子の教育論があざやかに提示されている。女子英学塾の目的は、前掲のごとく英学を専修し、英語教員を志望する女性に必要な学科を教授する点にあった。主要な教科は、英語と英文学であり、*Liberal education* すなわち教養を目的とした。これは、女性の個性的な人格教育をめざしていた上で欠かすことはできない。同時に、塾の目的に教員志望者には文部省検定試験に応ずべき学力を修得させることをあげている。教養を目的とする女性としての人間教育と働く女性並びに英語教育の指導者育成をめざす職能教育を一体とみなしていたところに女子英学塾の特色があり、そこに婦人の自覚的精神と社会的地位の向上を実現していこうとした梅子の教育方針を知ることができよう。

この意味を象徴的に示したものが、円満な婦人 *allround women* になるよう努めるという教育理想である。梅子は「こういう考から月に一、二回は英語の外に色々の問題について専門家のお話を伺いたい」とのべているが、一週間十五時間の授業（一週五日、土日曜休み）の科目は、英語、英文学、心理、教育学を必修とし、国語、漢文、歴史、英詩などを選択としている。また、明治三十六年（一九〇三）に公布された専門学校令に準じた規則では、本科、師範科、選科の三科をおき、英語は三科とも一週十二〜十六時間、ほかに倫理、教育、心理、国語、漢文、歴史、体操などの科目は一週二十二、三時間修得することとしている。

さきにふれたように、梅子は、これまで英語、英文学の修得と研究を中心にしてきたが、英語以外の学問を学ばなかったわけではない。むしろ積極的に、生物学、歴史学、宗教、哲学、倫理学、論理学、心理学、文学、経済学などを学び、英語、英文学を他の分野の学問研究と関連づけながら位置づけ、その専門研究にとりくんできている。梅子にとって、英語、英文学を学ぶことは知識を得ることのみを目的にしたのではなく、欧米の信仰、思想、文化を理解し、日本の文化と精神の伝統とあるべき女性の社会的、精神的向上をはかるためであった。英語、英文学を学ぶことは他の諸学問を知ることではなければならない、他の諸学問を研究することが英語の高等教育と専門研究に役立つことになるのである。英語、英文学は、外国の思想、物の考え方、理想を知り国際親善に役立つ研究の宝庫である。また、専門の学問だけでは視野が狭くなり、謙遜さを忘れごうまんな利己主義者にならないとも限らない。「人間として必要な教養を身につけよ」と述べた如く、教育における究極の目標は、人間をつくることにあり、人格を完成するところにある、というのが梅子の念願であった。³⁰ 真の女子教育は、円満な婦人 *allround women* になることであるという表明は、梅子の教育論の根本であり、彼女の女性観をもの語っている。

円満な婦人 allround women という場合の「円満」とは、多方面に広い認識を有する女性のことであり偏狭、ごうまん、無自覚で情熱もなく、何の意志をもたずに隷従している女性の精神と立場を克服する全人格教育をさしている。広い視野をもち、正義と人間愛に燃え自主的で自覚的な独立心と研究心の旺盛な女性の倫理性と「精神力の鍛錬」の重要性。精神面と現実面、専門研究と総合的な研究の一体性。国際性をもち社会と家庭で主体的に活動する日本人としての女性の意志と自立的精神の確立——梅子は、こうした教育理想をにかけて近代女子教育を先駆的に開拓した。英米語科を中心とした人文学科や人間形成のための学科の設置、あるいはその併置にもとづく国際的、国内的な全人格形成の個性教育は、当面する現代日本の教育課題であり、女子英語教育の目標でもある。しかもここに示された教育理想は、風雪をこえてなお脈々として継承され、よりいっそう高めていかねばならない今日の女子教育の命題であり目的であろう。「教育は更に進歩しなければならぬ。その教育には、信仰と愛と、激励と同情と、そしてもっと教育をうけ易い、幸福な条件が与えられねばならない」——津田梅子の開拓した道は、今なおはるか彼方につづいている。

註

- (1) 『津田梅子伝』二一九頁
- (2) 同右 二四五頁
- (3) 『津田梅子文書』七四—七五頁
- (4) 金森トシユ、藤井治枝『女の教育一〇〇年』二一—一六頁
- (5) 太政官第二一四号布告
- (6) 『津田梅子伝』一四頁。『津田梅子文書』八二頁

- (7) 『女在教育一〇〇年』一〇頁
 (8) 『津田梅子文書』二頁
 (9) 同右 八六頁
 (10) 同右 九〇頁
 (11) 『津田梅子伝』九一頁
 (12) 『津田梅子文書』四七三頁
 (13) 同右 四七七頁
 (14) 『津田梅子伝』一四〇頁
 (15) 同右 一四九頁。『津田梅子文書』二八頁
 (16) 『津田梅子文書』五九頁
 (17) 『津田梅子伝』一九二頁
 (18) 同右 一九九—二〇五頁
 (19) 同右 二〇九—二一〇頁
 (20) 同右 二一九頁
 (21) 同右 二二七—二二八頁
 (22) 同右 二四〇—二四二頁
 (23) 同右 二四二—二四六頁、『津田梅子文書』一一四頁
 (24) 『津田梅子伝』二六〇頁
 (25) 同右 三五六—三六七頁
 (26) 『東京独立雑誌』第二十三号
 (27) 『津田梅子伝』二四六頁
 (28) 『津田梅子文書』六二—六四頁
 (29) 『津田梅子伝』二六二頁

- 30 同右 三六三―三六四頁、三七二頁
31 同右 二九八頁

追記 この小文を書くにあたって参照した『津田梅子伝』ならびに『津田梅子文書』は、本字の近藤久美子先生、井口美登利先生のお世話により入手し読むことができたものである。末筆ながら両先生に心から感謝の意を表する次第である。

鎌倉幕府衰亡論

——蒙古合戦に敗れた東国政權——

堀 教 通

はじめに

十三世紀後半、欧亜にまたがる大元帝国に君臨した忽必烈汗が東海の島国日本を攻略せんとして派遣した二度の大遠征軍は「神風」の庇護によって二度とも敗退した。所謂文永弘安の役（一二七四年、八一年）である。

しか忽必烈は二度の失敗にこりて日本攻略を諦めたわけではなく、それを知っていた鎌倉幕府はその後も殆ど半永久的に臨戦体制を強いられた。弘安の役後半世紀にして滅亡した鎌倉幕府は、この永続的緊急事態の重荷に押しつぶされたと言えよう。しかし外敵の恐怖から生ずる緊張感を利用して幕府の基盤を強化することが出来なかったのは施策の誤りと言えそうだ。本稿ではその命運を左右するに至ったと思われる鎌倉幕府の戦時施策の分析を試みる。

恩 賞 問 題

弘安の役後幕府が直面した問題は、何時来るともわからぬ元軍再襲にそなえて防衛線を建て直すことと共に、元軍

撃退に功ありとされた将士や寺社に対する恩賞であった。戦費と言い恩賞と言っても結局は所領（詳しくは職と呼ばれる土地収入の分け前）であった。当時の武士は主人に対する義務として、自ら騎馬、武器、食糧をととのえて出陣したのであり、戦功を立てれば恩賞として「所領」を与えられた。ところが対蒙古戦争では敵を撃退したといっても寸土を得たわけでもないのに、幕府にとっては恩賞を与えることは至難の業であった。今日のように紙幣を乱発してその場をすごすという便利な方法は考えられなかったから、幕府は必死の思いで恩賞地を探した。

その上鎌倉の軍備調達方法そのものが恩賞問題を一層困難にした。⁽¹⁾ 対蒙古戦の危機を通じて、例えば東国で兵を募り西へ送ったというような記録はなく、北西九州沿岸で防衛線を張ったのは九州に地頭職などの所領を有する武士に限られた。従って恩賞にあずかるべき者も九州住人が殆ど全部であった。しかも沿岸警備は一日たりともゆるがせに出来なかった。もしこれらの武士が九州以外の地に所領を与えられては九州沿岸防備の人手が薄くなる恐れがあったので、幕府は九州武士に対する恩賞地は九州に限ると定めたようであるが、その結果恩賞の授与は一向に進行しなかった。

弘安の役の勲功に対する恩賞が始ったのは役後四年の一二八六年であり、中には二六年も後の一三〇七年に受賞という記録も残されている。しかもこれらの恩賞は家系断絶などの理由で所領が没収される度に与えられたものである。例えば一二八六年の恩賞はその前年に起った所謂霜月の乱で討伐された肥後国の守護安達泰盛とその一党の所領であった。⁽²⁾

その後数回にわたって行われた弘安の役の論功行賞では、授与さるべき所領が限られていたから止むなく地頭職を分割して授与するというような事が行われ、肥前神崎庄の地頭職は四百分されたという。⁽³⁾ 恩賞要求の提訴に悩まされ

た幕府は一二九四年恩賞打ち切りを宣言したと信じられていたが、最近の研究によるとこれは誤解であり、⁽⁴⁾ 上述の如く少くとも一三〇七年まで恩賞の授与が行われていた証拠が存在する。

九州武士の恩賞地は九州に限るという幕府の政策は、対蒙古戦中という事情から止むを得ないものであったと思われるが、筑紫海岸で何時ともわからぬ敵襲を待ちかまえていた将士の士気を鼓舞するという恩賞本来の目的に関しては、それは明らかに失策だったと言わざるを得ない。鎌倉武士の第一の目的は地頭職を獲得することであった事は有名な『竹崎季長絵詞』に照して明らかである。地頭職の一部分しか与えられなかった武士達は恩賞を貰ってかえって憤懣を覚えたに違いない。何年も出陣して何の恩賞沙汰にもあづからなかった者の鎌倉殿に対する忠誠心にひびがらなかったとしたら不思議と言わざるを得ない。

戦時体制下であったが、いや戦時体制下であったればこそなおさらのこと、幕府は恩賞問題についてその基本的態度を変えるべきであった。九州武士にその武力を拡散させないという条件をつけて、九州以外の地に所領を与えることも可能だった筈だ。九州という限られた地域において、永年の間には不満足とは言え相当数の恩賞を与えることの出来た幕府であるから、その他の地域、殊にその本拠地関東などではもっと容易に恩賞地を発見出来た筈である。この意味に於ても、元の侵攻が幕府の本拠たる東国から遠くはなれた西国の果てに起ったということは幕府の負担を何倍も困難なものにしたと言える。

九州武士の恩賞を困難にしたもう一つの原因は、武士と論功行賞を競った神社仏閣の存在である。敵国降伏の祈願を行ったのは朝廷ばかりでなく幕府も同様で、全国的主要神社仏閣に依頼して或は定期的に、或は一時的に祈願を行った。一四世紀に入ってからこの祈願が行われていた証拠が残っている。⁽⁵⁾

いう迄もなくこれらの祈願祈禱は無料で行われたのではなく、御礼として幕府は恩賞を約束した。例えば弘安の役の二年半後に九州宇佐八幡の宮司に宛てた御教書⁽⁶⁾には、一二七五年地頭職^{しよ}を奉納して祈願をしていただいた甲斐あつて弘安の役で敵の艦船は破損沈没したが、今また敵襲の噂があるので日向国村角別府庄の地頭職を贈るからよろしく祈禱をお願いする、と述べている。

鎌倉武士の素朴な信仰は『絵詞』に明らかにされているが、自らの武運長久を祈る季長の個人的信仰と国家のために敵国降伏を祈る幕府当局の信仰とは本質的に同じものであり、彼らは「神風」は彼らの真摯な祈りに対する神仏の応答と信じていたことは疑いない。又全国の神社仏閣は競って、「神風」が吹いたのは夫々の社寺に祀られている神仏の威光のあらわれであると主張して恩賞を要求した。その要求の通らなかつたことも多かつたことは武士の場合と変りないが、幕府が武士の恩賞よりも神社仏閣の恩賞を先にしたことは注目すべき事実である。上述の宇佐八幡宮に対する恩賞と同じ日に九州大隅の正八幡宮にも地頭職が贈られ⁽⁸⁾、同年末には高野山丹生社が和泉の国で地頭職を贈られて⁽⁹⁾いる。上述した如く、九州武士が弘安の役に関して恩賞を与えられたのは一二八六年が最初であつた。

御家人の貧窮化

鎌倉幕府が蒙古軍の再襲に備えて沿岸防備を固め、恩賞問題に苦しんでいる間にも、その存立の基盤である御家人等は経済的危機に直面していた。幕府はその御家人の奉仕によって成り立っていたから、御家人の貧窮化は幕府の存立を危くするものであつた。しかし幕府当局者らには御家人貧窮の理由が理解されていなかったから、その救済方法もわからなかつたのは当然である。

一二八四年即ち弘安の役の三年後、九州武士と神社仏閣の恩賞についての不満に答える目的を有すると思われる一連の施策が採られた。⁽¹⁰⁾それによると幕府は、九州並びにその他の諸国（恐らくは全国）の主な寺社で過去においてその所領を売却や抵当流れなどによって喪失したものがあつたら、それらの所領は全てもとの寺社に返還すべきことを命じたのである。それと共に、九州在住の御家人でその所領を過去二〇年以内において売却抵当流れによって失つたものは、借りた元金を返さなくてもその失つた所領を取り返すべきことを命じた。⁽¹¹⁾

これらの条令は蒙古合戦に直接貢献しなかった「凡下、借上」らの犠牲によって、社寺と九州御家人に恩恵を与える目的で発せられたことは疑いないが、それと共にこれら一二八四年の条令はその後一二九七年に発せられた、より徹底的な永仁の徳政令⁽¹²⁾とその内容が類似していることに注目される。所謂永仁の徳政はその対象を所領に限らず、質入れ以外殆どすべての御家人の借財に拡大し、その適用範囲も九州住人に限定されていないので、御家人全体の経済的貧困救済を目的としたものであることは明らかである。

しかし乍ら鎌倉御家人の貧窮化は、蒙古合戦によって始つたものでない事も明白である。一三世紀中頃、即ち蒙古問題が発生する一世代も前から御家人の貧窮が問題となつていたからである。一二三九年頃から幕府は屢々御家人に対して儉約を命じ、僧侶商人借上らを地頭代に任命することを禁じ、⁽¹³⁾私領（本領）・恩地の売却や抵当入れを禁止する法令を出している。⁽¹⁴⁾一二六七年、最初の蒙古国書が到着した年の前年には、御家人による私領並びに恩地の売却抵当入れが共に禁止され、既に売却されたり抵当に入れられたりしているものについては、元金だけを返済して取り戻すことを命じている。⁽¹⁵⁾数年後には抵当に入れられた御家人の所領は元金の返済がなくても本来の持ち主に返還すべきことを布告した。⁽¹⁶⁾これは文永の役の起る一年前のことであつた。斯の如く徳政令に似た一連の法令が蒙古合戦の始ま

る前から布告されつつあったということは、蒙古合戦だけが徳政令発布の原因であったということを否定する。しかし乍らこれらの法令が蒙古合戦と無関係だとも言えない。上述の如く幕府の恩賞授与の努力は一二九四年以後も永く続けられていたことから、徳政令に連なる一連の法令は御家人並びに寺社に対する恩賞の意味を持ったものであったことは否定出来ない。殊に一二八四年の法令は恩賞問題を抜きにしては考えられないし、一二七三年と九七七年の各法令も、西国沿岸の守備に当たっていた御家人の援助を少くとも目的の一部にしていたに違いない。しかし乍ら幕府の経済政策が効を奏さなかったことは、同じような法令が繰り返し発令されたり廃止されたりしていることから明らかである。その結果、恩賞問題も満足に解決されず、主として戦争の重荷を背負った九州の御家人達の経済的貧窮化は深刻化の一途をたどって行った。

鎌倉幕府はその御家人制度を根本的に立て直す必要に迫られ乍らそれが出来なかったのは、御家人ら貧窮の原因を理解していなかったというよりも、土地を媒介とする政治体制以外の政治制度を考えることが出来なかった東国農民の偏見のせいだったと思われる。

鎌倉武士貧窮の原因として一四世紀初頭の幕吏は武士社会の過差と所領の細分化を挙げている。⁽¹⁸⁾遺産の均等相続による所領の細分化は当時の記録によって明らかであるが、⁽¹⁹⁾それが鎌倉御家人だけの問題であったとは思はれない。次に過差とは今日の表現では贅沢であり、生活水準の向上ということであろう。鎌倉幕府の基礎も固まり比較的平和な日々が続いて来ると、農産物も多くなり、商業や手工業も興って来たことは当然である。僧侶が金貸し業に手を出し「凡下」らは商人となり、或いは刀剣・甲冑・絹織物・刺繍の製造などによって生計を立て始めた。このような活動の中心は朝廷公卿大社寺など荘園の本所や領家が多く、人口も最も集中していた京都奈良とその周辺であったことは

言うまでもない。更にその西では瀬戸内海を中心とする国内通商や中国貿易も古くから行われていた。このような情勢の下で鎌倉武士団に加入出来なかった近畿西国の住人らが次第に細分化される農地を捨てて、他に生きる道を求めて行ったに違いない。しかもここでは御家人の数も少く、⁽²⁰⁾鎌倉の威勢も及ばぬ所が多かったから、これらの「凡下借上」らが次第に物資の流通と通貨（主として中国から輸入された宋銭であった）を支配し始めたとしても不思議でない。これが鎌倉幕府の基礎が固まり、平和が続き始めると共に、その御家人らの経済基盤が揺ぎ始めた原因だろう。

しかしながら幕府当事者らはこの理を解さなかったから、次第に貧窮化する御家人の救済手段としては儉約令と借金棒引き令以外に考えられなかった。例えば中国貿易を統制することによって幕府は比較的容易に、当時通貨の大部分を占めていた宋銭の流通を規制する事が出来た筈である。或は又、所領の維持も出来なくなった貧困武士の代りに所謂凡下借上や商人を取り入れて御家人制度を改制することが何故出来なかったのか。度々の徳政類似の法令にもかかわらず次第に貧窮化して行く御家人を切り捨てるかわり、幕府は屢々祖父又は曾祖父の代に御家人のおすみ付を頂戴した者は所領がなくなっても御家人であるという条令を布吉している。⁽²¹⁾所領を失った御家人は幕府にとっては無用の長物であるが、その血統が大切とされたのである。従って何ら血統のない「凡下借上」商人の類は如何に経済力があっても御家人にすることは出来なかったのであろう。

鎌倉幕府は蒙古合戦に貢献した兵士や寺社に対して恩賞を以て報いようと努力を続けたが、結果としてはそれに満足するものは少く、不平を訴えるものが多かった。多くの者は恩賞を期待し乍ら空しく生涯を終えたり、幸運にも恩賞を与えられた者も期待はずれの小額に腹を立てた者が多かったに違いない。

又、徳政令やそれに類似の法令によって、せっかく手に入れた所領の無償返還を命ぜられた「凡下借上」や商人達

は鎌倉に対して怨みを抱いたに違いない。彼らの多くは近畿・西国の住人で、御家人制度の恩恵を受けることの出来ない人達であった。一三三三年、鎌倉幕府を崩壊させた中心勢力は後醍醐天皇に味方した近畿の非御家人層であったことは不思議でない。

後醍醐天皇に呼応して兵を挙げ、西国における反幕の先頭を切ったのは竹崎季長の『絵詞』に描写されている菊池・河野勢であった。⁽²²⁾ 彼らの謀叛の動機は明らかではないが、戦功に対する不満からだと考えて、当らずと雖も遠からずだろう。

北條專制政治

一三世紀の中頃までに鎌倉幕府の権力は完全に北条家に握られてしまったが、以来北条の執権政治は益々專制的になって行ったことは良く知られている。その傾向が顕著になったのは執権時宗の施政時代(一二六八―八四年)で、時宗は屢々その私邸で私的な会合を開いて国事を討議し、幕府の正式政策決定機関である評定衆は空名化して行った。

この寄合と称せられた会合には評定衆の重要メンバー、北条一門の有力者と共に時宗の御内即ち私兵も出席した。はじめは私的な会合であった寄合いが次第に公的性格を帯びて来たのは、既に蒙古襲来の危機が迫っていた時宗の執権就任以来であり、緊急事態に対応するための応急措置であったことは明らかである。その緊急事態が半永久的に継続するにつれ寄合も永久制度化してしまった。

寄合が幕府の最高政策決定機関として制度化するにつれて評定衆は名ばかりとなったが、それは評定衆の構成メン

パーが時宗時代に急速に北条一門化し、しかも二〇才以下の若輩が多くなつたことから何うことが出来る。一二二五年の最初の評定衆会合の時には北条一門のメンバーは一人も含まれていなかったが、半世紀後には半数近くが北条であつた。⁽²⁴⁾

評定衆が寄合によって権力を奪われたということは執権の権力が得宗と称される一門の頭領に移つたことを意味した。時宗の後を継いで執権となつた者は十人を数えるが、そのうち得宗として実権を振つたのは二人だけであつた。鎌倉末期の執権の一人は寄合に出席を求められて涙を流さんばかりに感激していることからも、執権職が空名に等しかつたことが伺われる。⁽²⁵⁾

このような事態では、得宗家の御内が次第に権力を握つて来たのも自然であらう。彼らのうちの有力者は得宗家の家司として権力を専らにし、侍所の所司代として事実上これを支配し、守護や守護代に任ぜられ、或は目付として得宗の手足となつてゐる。

北条一門による権力の独占は鎌倉だけのことでなかった。一門が抑えていた守護職は幕府草創の頃は二カ国に過ぎなかつたが、鎌倉後期には半数近くが一門の手中にあつた。この傾向も蒙古襲来の危機が起る以前から見られるが守護職が急速に北条一門に集中し始めたのは蒙古をめぐる危機が発生してからである。⁽²⁶⁾又、一二八〇年代から九〇年代にかけて、九州並びに本州西端、即ち蒙古侵攻の恐れのある地域における軍事指揮権が北条一門によって独占されて行つた。一二八二年に新設された姪浜奉行に任ぜられた北条一門が、それまで鎮西奉行を勤めて来た小武・大友両家の軍事指導権を奪つた。二年後には鎮西奉行が改組され、今まで小武大友両家で占められていた権力は鎌倉から送り込まれた三奉行と時宗の義父安達泰盛を加えた六奉行で分担されることになつた。⁽²⁷⁾一二九三年には九州全般の軍事

行政権を大中に委任された九州探題が設けられ、大友・小弐らの権力は更に縮小された。⁽²⁸⁾以来幕府の滅亡に至るまでこの九州探題職を占めたのは勿論北条一門に限られた。そしてその下に設けられた政策決定機関の評定衆も、訴訟機関の引付衆も、共に北条一門によって牛耳られた。⁽²⁹⁾

本州西端の長門・周防両国の守護職も、異国合戦の名において鎮西奉行と同じ運命を辿った。元来この両国守護には夫々二階堂と藤原家とが代々任ぜられていたが、文永の役の後、執権時宗の弟宗頼が両職を兼ねてから北条一門がこの両職を兼務し、次第に長門探題又は中国探題と称されるようになった。

幕府の権力が北条一門によって独占されるにつれ、一門内の権力争いが激しくなった。それは北条宗家の得宗が一門の有力者よりも自家の身内や縁者を重用したからである。一二七二年、執権時宗の庶兄で当時六波羅探題を勤めていた時輔とその一味が謀叛のかどで攻め殺された。この時殺された一味の中に鎌倉で評定衆を勤める北条一門の有力者二人が含まれていた。時輔は時宗より三才年長であったが、父時頼の死に当って京都にやられ、わずか一四才の時宗が得宗の座についていたので、執権に対して叛心を抱いていたということはあり得る事である。しかし、その後時輔一味を討った者達が処罰を受けているので、全ては時宗一派の策略ではなかったかと思われる。⁽³⁰⁾

次いで一二七七年、時宗の連署北条義政が病氣を理由に辞職し、間もなく鎌倉から見えなくなり、その所領が没収された。⁽³¹⁾その後時宗は晩年に至るまで連署を置かなかったのは、執権職そのものが空名となりつつある時その補佐役も勿論必要がなかった為だろう。

時宗の下で鎌倉を動かしたのはその身内で侍所所司代と得宗家々司を兼ねていた平頼綱と、時宗の岳父安達泰盛であった。泰盛は上野・肥後両国の守護を兼ねた東国御家人の有力者で、竹崎季長の『絵詞』にも恩賞奉行として描か

れているが、時宗の死と共に頼綱と仲違いを生じ、翌年の所謂霜月の乱で頼綱の軍勢に攻め殺された。二人の違和の原因は恐らく一四才で得宗となった貞時をめぐる権力争いであつたろう。

その後頼綱は鎌倉の実権を握り、貞時に反対する可能性のあるものを容赦なく排除した。かくて一二九〇年、先に殺された時輔の次男も逮捕処刑されねばならなかつた。⁽³²⁾

一二九三年、今や成年に達した貞時は頼綱の権勢を恐れてこれを殺戮した。一三〇五年、貞時の従弟で連署であつた時村が、やはり従弟の宗方に殺され、その宗方は執権の手の者によつて討たれた。貞時にはまだ子供がなかつたので、その嗣子の座をめぐる従弟達がこの争いに加つていたといふ。⁽³³⁾

鎌倉におけるこのような権力斗争が、沿岸防備のために東国武士を動員出来なかつた原因かも知れない。緊急事態に処するための独占体制がかえつて政治不安を招き、ひいては危機に対する有効な手が打てなかつたとすれば悲劇としか言ひようがない。北条一門による権力の独占が関東御家人の離反を招き、更に進んで得宗一家の専制的権力の行使が北条一門の団結を破壊したのである。一三三三年の建武中興の企図は足利・新田らの鎌倉から締め出された御家人勢の協力なしには成功しなかつたであらう。又、これに呼応して西国に挙兵し九州や長門の探題を攻め落したの(34)は小式大友島津らであつた。彼等は元々九州九カ国の守護職を三分していたが、蒙古合戦中に次第にその権力を削られ、最後には夫々一国の守護職しか保持してゐなかつたことから、その挙兵の動機は明らかかうだ。

結 論

鎌倉幕府は「戦いに勝つていくさに負ける」という諺の通り、二回に及んだ大元軍の侵攻企図を打ち払いながら、

結局長期戦に敗れてしまった。文永・弘安の役後五〇年も存続したのであるから、蒙古合戦が鎌倉滅亡の直接原因と言えないかも知れない。しかし乍ら幕府滅亡の要因とみられる諸現象が、蒙古の侵攻企図を中心とする緊急事態の下で顕著に現れたのであるから、少くともこの戦争が幕府の滅亡を早めたことは疑い得ない。

鎌倉幕府が蒙古合戦に際しておかした重大な過誤の一つは蒙古の挑戦に対して真向から受けて立ち、戦争回避又は早期解決の努力を全くなさなかったことである。この外交の欠除は東国農民社会に根ざした武士政権の宿命であつたろう。又彼らが恩賞問題の解決と貧窮化する御家人の救済に努力を続け乍らも成果を上げ得なかったのも東国武士の制約であつた。貨幣経済を理解せず、自らを御家人と称していた東国武士にとっては、伝来の御家人制度を改組し徐々に経済力を蓄えつつあつた凡下借上商人を御家人の仲間に入めることは考えも及ばなかつた。

又、東国に勢力の基礎を有した鎌倉幕府にとって、御家人の数も多くなき旅行に二カ月もかかつた西国⁽³⁵⁾の涯に起つた危機は如何にも不都合なものであつた。かかる情勢下において大元帝国を相手に半永久的な戦いの遂行を強いられ、た鎌倉が、次第に専制化して行つたこともやむを得ないことだつた。しかしその為に内訌を生じ、御家人を離反させてしまつた事も事実である。結局、鎌倉幕府は東国政権であり、近畿西国を含む国家的政権に成長出来ずに滅亡したと言えよう。

註

本稿は一九六七年、コロンビア大学提出の博士号請求論文 (Kyotsu Hori, "The Mongol Invasions and the Kamakura Bakufu") の一部に推敲を加え、日本文に書き改めたものである。

(一) 相田二郎『蒙古襲来の研究』(東京、一九五八年) 第八章。

- (2) 「比志島文書」弘安九年閏二月二八日「福岡県史資料」(東京、一九三二年—三九年)一〇卷、六三—六七頁。
- (3) 相田二郎、上述書、二八二—九〇頁。
- (4) 同右、二九二—九六頁。
- (5) 山田安榮『伏敵編』(東京、一八九一年)、相田二郎、上述書、九七—一二三頁。
- (6) 「宇佐縁起」山田安榮、上述書五、二七—二八頁。
- (7) 例えば九州肥前国武雄神社の宮司は一三〇九年、永年にわたる申請にも拘らずいまだに恩賞にあずからないと幕府に抗議している。この抗議文によると、文永の役に際して同社の宮殿から敵艦船に向って矢が放たれ、弘安の役では神風が吹く直前に同社の宮殿の上から三流の幡が敵艦に向って飛んだという。〔「武雄神社文書」三、山田安榮、上述書六、一六頁。佐藤進一、池内宏『中世法制史資料集Ⅰ、鎌倉幕府法』(東京、一九六五年)四六四—六五頁〕
- (8) 「島津文書」弘安七年二月二八日、山田安榮、上述書五、二七頁。
- (9) 「高野山文書」正応六年三月二八日、山田安榮、上述書五、六一—六四頁。
- (10) 「新式目」一、一九、二〇、弘安七年五月二〇日(佐藤進一、池内宏、上述書2、史料四九—一五二八)「新編追加」一六五、弘安七年六月二五日(同上書2、史料五四四)。「高野山文書」弘安八年九月(同上書3補、史料八)。「新編追加」一七三—一七七、一八一—一八三(同上書3、史料八〇—一八四、八七—八九)。
- (11) 「新式目」二四、弘安七年五月二〇日(同上書2、史料四九—一五二八)「新編追加」二一四、弘安七年九月一〇日(同上書2、史料五六二)。
- (12) 「関東御事書法」永仁五年三月六日、「関東より六波羅に送る御事書法」永仁五年七月二二日(同上書2、史料六五七—六四)。
- (13) 『吾妻鏡』仁治二年二月一日。
- (14) 「新編追加」二八四、二五八、三五、二七五(佐藤進一、池内宏、上述書2、史料一六、一二六、一四五、一五〇)。
- (15) 「新編追加」三五、六三(同上書2、史料一四五、一三九)。
- (16) 「近衛家本追加」九三、九四(同上書2、史料四三三、四三四)。
- (17) 「新編追加」七〇(同上書2、史料四五二)。

- (18) 『平政連諫草』。
- (19) 例えば鎮西奉行大友能直の遺産はその子八人によって分割された。「志賀文書」(田北学『増補訂正編年大友資料』二卷、史料一九一)。
- (20) 鎌倉幕府御家人の数は詳しくは知られていないが、頼朝が弟義経と争った時に鎌倉へ集った武士は主なものだけでも二、〇九六名あったと『吾妻鏡』に記されている(文治元年一〇月二十四日)。御家人の大部分は東国武士で、石井進によると近畿以西の国々における鎌倉御家人の数は一国につき十数人からせいぜい五十人足らずであったようである(『鎌倉幕府論』岩波書店『岩波講座日本歴史』五(東京、一九六二年))。
- (21) 「貞応弘安式目」九一、弘安一〇年五月二五日、「吉田家本追加」一八、正応六年五月二五日(佐藤進一、池内宏、上述書2、史料六〇九、六三九)。
- (22) 『博多日記』、『太平記』一一「筑紫合戦のこと」、同上書七「河野謀叛のこと」。
- (23) 『建治三年記』。
- (24) 佐藤進一『鎌倉幕府守護制度の研究』(東京、一九四八年)一八四―一八五頁。
- (25) 『旧輯金沢文庫古文書』2、史料六二一(佐藤進一「鎌倉幕府政治の専制化について」竹内理三編『日本封建制成立の研究』東京、一九五五年)。
- (26) 佐藤進一、同上。
- (27) 「新編追加」一六五、一六六、二二四(佐藤進一、池内宏上述書2、史料五四四、五六九、五六二)。
- (28) 「島津家文書」、正応六年三月二日、御教書(『大日本古文書』家わけ第一六、三四号)。佐藤進一『鎌倉幕府訴訟制度の研究』(東京、一九四三年)第五章。
- (29) 同上書、三二五頁。
- (30) 『関東評定伝』文永九年。
- (31) 同上書、建治三年。
- (32) 『保暦間記』正応三年。
- (33) 同上書、嘉元三年。

(34)

『博多日記』。『太平記』一一、「筑紫合戦のこと」

「長門探題降参のこと」。

(25)

『竹崎季長絵詞』。

後	編
記	集

▽「紀要」第十一号をおとどけいたします。今号は、昨年四月に編集委員会をひらいて編集方針を決め、五月下旬に仮論題の提出をお願いすることによって、出来る限り早く発行できるようとりくんでまいりました。多忙にもかかわらず、心よく玉稿をお寄せくださった先生各位に感謝いたします。諸先生のお力を得て昨年十一月には入稿することができ、十二月から本年二月までに三回の校正を行い、ここに発行するにいたしました。次号からも、このペースにしたがい編集発行していきたいと考えております。

▽寄せられた原稿の文字を読んでいると、執筆された先生方の、日頃の研究教育についての成果と深い省察のほどをうかがい知ることができます。研究と教育にとりくむ熱い息吹きを感じます。今号にも、国際性と歴史性と現代性をそなえた視点にたちつつ、各分野からそれぞれのテーマをほり上げた論文を掲載することができました。それらはいずれも、英米語教育、研究の内容と方法とを提示するものであり、女子教育のありようを考究していく道程こそが共通の研究テーマであることをおのずから明らかにしているように思われます。

▽「紀要」は、研究と教育に関する成果の発表と交流の場であり、本学における研究教育活動の結晶の一端をあらわすものです。その意味で、「紀要」は、本学のいのちの鼓動である、と思うのです。――「われらに要るものは銀河を包む透明な意志、巨きな力と熱である……」（宮沢賢治）。本学の女子英米語教育と女子教育研究のよりよき一層の発展をめざして、この「紀要」をさらに充実させてくださるようご尽力ご支援のほどお願いいたします。また、多くの方々が「紀要」をお読みくださり、ご叱正とご示教をお寄せいただきますようお願い申し上げます。種々便宜をはかっ

東京立正女子短期大学紀要 第11巻

昭和58年2月20日 印刷

昭和58年2月28日 発行

編 集 東京立正女子短期大学紀要編集委員会
印刷所 株式会社 三 協 社

〒164 東京都中野区中央4-8-9

T E L 03 (383) 7 2 8 1 (代)

発行所 東京立正女子短期大学

〒166 東京都杉並区堀ノ内2-41-15

T E L 03 (313) 5 1 0 1 ~ 3

THE JOURNAL OF TOKYO RISSHO JUNIOR COLLEGE FOR WOMEN

No. 11

February 1983

CONTENTS

The Development of Higher Education for Women in Japan	Kumiko Kondo	1
Office Automation (OA), Word Processor (WP), and Typewriting	Midori Iguchi	10
On <i>Cannery Row</i> ——Humanity of Doc and Mac——	Toshio Fukazawa	27
A Study on <i>Sartoris</i> ——Behind the Romantic——.....	Shuichi Sato	42
Education for Women by Miss Ume Tsuda	Kyocho Ishikawa	77
Political and Economic Impact of the Mongol Wars upon the Kamakura Military Regime	Kyotsu Hori	92

Published by
Tokyo Rishsho Junior College For Women

TOKYO JAPAN

ISSN 0386-7161